酉松会新聞

The Yushokai Shimbun

第８号

平成 27 年（2015）3 月 1 日 発行

巻頭挨拶　P３

- 緒方　徹　（昭 49 卒 会長）：それぞれの「初心」

小平 G 人工芝化への期待　P４

- 高峯 文世（昭 43卒）：小平グラウンドへの想い、人工芝化への道筋　P４
- 内田　守　（昭 50 卒）：「人工芝化」に思う　P７
- 吉田　充　（平 22 卒）：小平人工芝化 PJ は誰のものか　P９
- 田中 克弥（４年 主将）：学生側からの想い　P11

戦いを終えて　P12

- 赤星 真一（平４卒 監督）：関東リーグへの挑戦 ～ 序章　P12
- 田中 克弥（４年 主将）：自分との戦い　P14
- 小泉 武広（４年 GM）：本気　P15
- 蝦子　樹　（４年）：振り返りたくもない　P17
- 野村 修斗（4年）：次世代への期待　P18
- 満井 一成（４年）：器と理想　P19
- 宮村 開人（４年）：四年間を終えて　P20
- 橋本 安未（３年 MGR）：ア式蹴球部の一員として　P21
- 渡邊 りお（３年 MGR）：未だ見ぬ舞台を夢見て　P22

平成 27 度シーズンに向けて　P23
- 金田 大樹（3年 新 GM）：挑戦と創造 ～1部昇格へ向けて～

東西・酉松会有志の会　P24
- 松丸 鉱市（昭 31 卒）：関東酉松会（シニア）有志の会　P24
- 柴田　暁　（昭 46 卒）：関西酉松会のご報告　P25

海外便り　P27
- 吉岡 基夫（昭 49 卒）：世界を股にかけてサッカーを楽しんでます　P27
- 松井 浩通（昭 63 卒）：アメリカで考えたこと　P30
- 釼持 隆雄（平 7 卒）：近況　P31
- 森松 央志（平 14 卒）：サッカーの母国で Kick & Rush　P32

自由テーマ　P33
- 高田 勝巳（昭 30 卒）：私的サッカー論　P33
- 斎藤 哲雄（昭 35 卒）：松本弁護士と囲碁のはなし・ほか　P35
- 田中 好輔（昭 41 卒）：随想 我が郷里のヴァンフォーレ　P38
- 瀬川 雄二（昭 51 卒）：還暦ラン　P39
- 金谷　斎　（平 1 卒）：雑感 vol. 2　P42
- 鈴木 仁也（平 9 卒）：当時のこと（むさくるしい集団）　P44

追悼　P45
- 石井 暢生（昭 38 卒）：惜別 故岡田紀雄君を偲ぶ　P45
- 清水 征四郎（昭 41 卒）：故古川和正先輩を偲ぶ　P47
- 高橋 良多（昭 51 卒）：克くんの思い出 ～1周忌に寄せて～　P50

編集後記　P52
- 福本　浩　（昭 52 卒 編集長）：発見、そして追悼

巻頭挨拶

それぞれの「初心」

緒方　徹　（昭 49 卒 酉松会 会長）

昨シーズンは、本当に最後までハラハラしました。
今年こそは、“サッカーって面白い！自分もやろう！”と思った
〈初心〉に帰って、快調な進撃を期待したいものです。

ところで“初心忘るべからず”という言葉は、
室町時代に「能」を大成させた世阿弥が残したものです。
世阿弥は現代まで伝わる数多くの優れた能の作品書いた他、能楽論を著した功績も
極めて大きく、その後の日本の芸能・文化に多大なインパクトを与えました。
“初心忘るべからず”は、世阿弥の能楽論の集大成である『花鏡（かきょう）』に記されています。

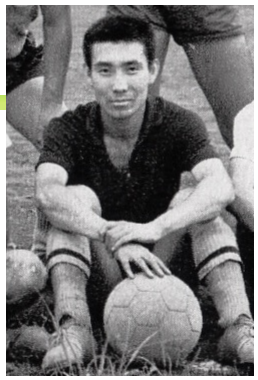
世阿弥は“人生にはいくつもの初心がある”としています。
現代で言うところの「初めの志」というような意味だけではありません。
〈若いときの初心〉、〈人生の時々の初心〉、〈老後の初心〉があるとしています。
そして、それぞれの〈初心〉を忘れてはいけないと説いています。

まず若い時は体力、技も充実し頂点かとも思えるかもしれないが、
改めて自分の未熟さに気づき磨き上げてゆかねばならないとしています。
そこを乗り越えて次のステップに達しても、云わば中年の壁があるとしています。
その道でトップに立つのは、数少ない人たち。それでも鍛練に励むべし。
怠れば、自分も退化して行き一線から取り残されます。そして〈老いたのちの初心〉　。
老いてしまった壁を乗り越え、一生をかけて道を追求して行くことが大事だというのです。
一般的には“心も体も若くありたい”と願う中で、老いに向かう人生の途中、
その時々の工夫をし、自分がどう生きてゆくのかを考えるべきだとしています。

世阿弥は、日本の芸能の特徴とも言われる「老いの美学」を
身体芸の世界で初めて確立したとされています。自分の人生を考えるに当たって
噛みしめたい言葉であるのは勿論ですが、スポーツの世界にも通じるところがあると
感じてしまいます。皆さんはどのように思われるでしょうか？
〈人生の時々の初心〉は何かを思い起こしながら、今年も現役への支援、
ＯＢの皆さんの交流を心掛けてゆきますので、皆様どうぞ宜しくお願いいたします。

小平Ｇ人工芝化への期待

小平グラウンドへの想い、人工芝化への道筋



高峯　文世　（昭 43 卒）

「小平グラウンド人工芝化」に関して、期待、感想、意見をとの依頼を受けておりましたが、学生時代の小平グラウンドでの汗と涙？の懐かしい思い出から、日本全国で人工芝化が進んでいる環境の中でこそ、私自身、恥ずかしながら今もプレーを続けられている状況等を述べる中で「小平グラウンド人工芝化」に触れる事とします。

我々の頃のグラウンドは、現在とは向きが 90 度違い玉川上水に沿った位置にあり、広さも現在より多少広く、地質はともかく、校舎の直ぐ近くで（1-2 年生は小平で授業）専用使用ということで、練習環境は他校に勝っていたと思います。従って素人集団の我々が（同期で高校時代にサッカー経験者は数人）、経験者ぞろいの他校と対等に戦うには、練習量で鍛えるしかないと、連日グラウンドへ。土埃が舞う春から夏にかけては、ホースで水撒きをしてから練習をしたものです。又、玉川上水サイドは日陰で土が固く、スパイクでも滑ってしまうことが多々ありましたが、夏は日陰ができるので、意識的にそちらの方にサイドキックなんかの輪ができてしまうことが多かったですね。大雨の日は水も溜まり泥沼状態になるので、もっぱらランニングで上水沿いに朝鮮大学往復、ある時は多摩湖近くまで・・しかも電信柱２本おきにダッシュ（インターバルランニング）なんてこともありました。翌日にはトンボでグラウンドならしを・・関東２部リーグ戦は殆どが御殿下、時たま駒沢第２で闘いましたが、特に御殿下は砂を入れていたので、小平とは逆に柔かく、足をとられたりで苦戦続きでした。

★昭和 41 年（1966）小平 G での夏合宿

高峯

左：スライディングタックルの練習（今なら イエロー or レッドカード・・）

右：同期の仲間　後列 高場・小林・小生・馬場　前列 松崎・佐藤

★昭和 41 年（1966）
小平 G での夏合宿

有田（スライディング）
高峯（裸）
小林 GM（笛をくわえている）
天野

後方グラウンドでは
ホッケー部が練習

我々の代（43 年卒）は４年間、夏・春の合宿は１回も外に行かず、
小平の学食脇の部屋に布団を自宅（又は下宿先）から運んで寝泊まりしていました。それだけにグラウンドには愛着があり、大げさですが、大学での人格形成の場でもあったので、卒業前に同期が集まり、春練習を始めていた新体制を励ましつつ練習着に着替え、グラウンドの感触を確かめながらボールを蹴り、最後の挨拶・別れをした記憶があります。そんな想いがあったので卒業後数年してグラウンドの向きが変わり、ホッケー場があった場所・方向に新グラウンドができていたのを見た時は一抹の寂しさを感じたものです。しかし、その後、都リーグの試合会場としてよく使われており、当時は未だ我が大学のグラウンドは交通の便等で、他校に比し優位だったんでしょうね。ところが 2002 年の日韓 W 杯開催を機に人工芝化が進み始め、４-５年前から大学も私学が先行し、公立大学でもかなり資金に余裕のある OB 会を持つ大学は人工芝化を実現しています。（首都大学も川渕三郎氏が理事長になったら即決で実現した）

このように各大学のグラウンドが人工芝化してくると、リーグ戦の会場はプレーしやすい人工芝がメインになるのは当然です。一昨年の GM 川幅君が述べている通り、一橋はプレー・戦術レベルの向上を目指す練習で他校に後れをとることになる。土のグラウンドでは、ボールコントロールに労力がかかる分ディフェンスし易い。パスサッカーというよりロングボール主体のサッカーになってしまい、人工芝での試合では対応に後れをとってしまう。 今後、ますます公式試合が人工芝グラウンド・天然芝で行われるのは明らかです。日々の練習環境で他校と差ができてしまうのは、上位を目指す我が母校の OB として耐えがたい思いです。次善の策として、今も時々実施していると聞いていますが、近くの、例えば我々シニアも時々練習会で使用する「東京ガス武蔵野苑」等を借り、雨の日もできるので、週１回位（重要な試合前には週２回も）練習することで対応していくのがベターだと思います。それには酉松会資金の充実が何としても必要ですが・・。又、暫くは現状の小平使用が続くわけなので、川幅君の言う「土のグラウンドの最低限の補修」は、「小平 G 人工芝化 PJ」検討会でも大学側にプッシュすべきでしょう。

話は飛びますが、私は 2006 年 12 月末に自宅で食事中におかしくなり、すぐに家内の運転で病院へ。“脳梗塞”ということで即入院。すぐに病院に行ったこと、当時、日本で認可されて間もないｔ-PA 投与による血栓溶解治療で、大きな後遺症もなく回復しました。医者からは、適度な運動が回復をより速める、酒も適度に飲むのが良いと言われていたので、その時見舞いに来てくれたシニアサッカー仲間から「すぐ練習会に来い！」と誘われ、退院１カ月後に駒沢の人工芝グラウンドで恐る恐るプレーをしたところ気分が良く動け、回復ぶりに医者もびっくり！それから一層頻度を上げてプレーを続けております。土のグラウンドだったら続けていたかは疑問です。今の人工芝は適度の弾力性もあり、格段に進化しているので、私が所属しているシニアサッカーグループの大会も練習会も人工芝か良い天然芝で行われ、大いにプレーを楽しんでおります。

★シニアサッカーの練習　於駒沢人工芝G

」

★ロイヤルサッカー東西対抗戦　於国立競技場

このように人工芝の良さを日々身を持って体験しておりますので、
小平の人工芝化の実現は是非にと願う者ですが、課題が多いと認識しており、
それらを一つずつ着実に解決していくしか道はありません。「小平 G 人工芝化 PJ」検討会の中間報告にあるように、“授業に使っていないから大学の負担は期待できない”のなら、
アメフトと共同で取り組みつつ、時間はかかるが、OB 会の寄付金を大きくしていくしかありません。実質的に定年も延長されているので、会費の徴収会員幅の拡大と
寄付年代の積極的寄付行動が期待されます。

最後に、現役学生たちのサッカーに取り組む熱き情熱が、
昇格と人工芝化への実現推進へ繋がることを念じつつ筆をおきます。

「人工芝化」に思う

内田　守　（昭 50 卒）

「芝生のグラウンド」・・45 年程前のサッカー少年にとって、
それは魔法の言葉であり、憧れと夢の言葉でした。

今からほぼ 40 年前、1970 年代前半に我々は小平のグラウンドでボールを蹴っていました。現在の現役部員諸君と比べると技術的にも戦術的にも劣っていたかも知れませんが、我々なりに努力を続け、３年生の秋には関東２部との入替え戦に勝利をおさめ、４年生時には関東２部でリーグ戦を戦う事ができました。そのおかげもあり、またコーチに就任して頂いたメキシコ五輪銅メダル獲得メンバーの１人である、三菱重工の片山洋氏のお力もあり、三菱重工・ヤンマー・古河電工・ヤマハ発動機などの当時の強豪社会人チームと、芝生のグラウンドで練習試合を何度かさせてもらいました。芝生の綺麗な緑、ふかふかとした足に伝わる感触、シュルシュルと音を立てて転がるボール。どれも素晴らしいものでした。

＊昭和 50 年（1975）卒業アルバムより

４年次に筆者は GM を務めた。

昭和 50 年代の小平グラウンド

あれから既に 40 年。
日本がワールドカップに出場するのは当たり前になり、海外で多数の日本人プレーヤーが活躍し、
サッカーは日本でもメジャーなスポーツになり、多くの国民を熱狂させるほどになりました。
日本のサッカーを取り巻く環境は大きく変わったのです。

一橋大学ア式蹴球部の置かれている環境も大きく変わり、また、選手の技量は大きく伸び、
部の運営方法も大きく変わってきました。それなのに小平のグラウンドは 40 年前・50 年前と
ほとんど変わらずに、そこにあります。雨が降れば相変わらず水溜りができ、晴天が続けば
相変わらず砂埃が舞います。ボールはイレギュラーな転がりをし、スライディングをすれば
擦り傷ができます。

＊現在の小平グラウンド＊

雨が降れば「湖」

乾けば「砂漠」

「我々の芝生のグラウンド」を持つ・・

40 年前には夢にも思う事ができなかったことが、今では当たり前になり、
多くの大学が自前の人工芝のグラウンドを持つようになってきています。
「芝生のグラウンド」が、我々にも手の届く、現実のものになってきたのです。
ただ素直に、少年の頃からの夢を実現したいのです。

「芝生のグラウンド」 いいね ！

人工芝化 PJ は誰のものか？

吉田　充　（平 22 卒）

「もし小平が人工芝だったら・・・」

部員の 1 人として、OB の 1 人として、かつてこんな妄想（？）をした経験のある方は、
かなりの数いらっしゃるのではないでしょうか。事実、2010 年 3 月に大学を卒業した私でさえ
在学時は当時の GM やキャプテンといった幹部たちを中心に人工芝化に取り組んでいたことを
傍目で見ながら、“人工芝だったらグラウンドに寝転がれるし洗濯が楽で良いなあ”などと、
のん気に考えていたものでした。

さて、ご縁あって 2014 年からは同期の高橋君より年度幹事を引継ぎ、
私も幹事会という議論の場に参加しております。普段幹事会に参加しない現役部員や卒業後は
毎年の寄付金のお支払いはされているものの、人工芝化の議論についてはイマイチぴんと来ない
多くの OB をターゲットとし、私の気がついたこと、考えたことを、ここで幾つかお伝えしたい
と思います。

ひとつめは、酉松会幹事会の運営についてです。
例に漏れず、私も卒業後は酉松会の活動から疎遠な時期が長く、自分を棚に上げて話すことに
なりますが、幹事会の出席率の低さ、参加者の偏った年齢構成、その結果として一部 OB に
長く負担がかかる構造に気がつきました。これらは構成員の自発性に依拠する OB 会という
組織の性質上、避けられないことなのかもしれませんが、こういった歪みを抱えつつも、
一部の幹事会メンバーの方々が限られた時間を縫って、ここまで「人工芝 PJ」を推進して
くださっていることを今一度サッカー部関係者の皆様に知ってほしいと思います。

もうひとつは、PJ を推進する為のエネルギーについてです。
OB である我々もいつか人工芝になれば良いなという思いは共有しているものの、
誤解を恐れずに言えば、現役部員が期待しているほど“いつまでに○○をしなければいけない”
という切迫感は持ち合わせていないというのが事実だと思います。頭で考えると PJ を進める為
に頑張る理由は幾つか浮かぶのですが、決して腹の底から燃え盛るようなエネルギーに裏打ち
されたものではない為、どうしても前への推進力は弱くなりがちです。

最後は、お金についてです。下世話な話ですが、私は毎年の酉松会費（寄付金）を
”学生時代にサッカー部で活動する為に借りていたお金の返済”と捉え、
ある種の義務感を持ちながらお支払いしています。
他の OB の方々も様々な思いを持って会費の支払に応じていることでしょう。
ただ、人工芝化の為にプラス数 10 万円の負担が発生するとなると、どうでしょうか。

気前よく払ってくれる方もそれなりにはいると思いますが、一方で、多くの OB にとっては数 10 万円の金額を拠出する際には相応の納得感が必要になってくるはずです。しかし OB が OB を説得するという構図は限界があると最近では感じています。やはりグラウンドを使うのは OB ではありませんから。

ここまでお読み頂ければ私の言わんとする結論が、そろそろお分かりになると思います。
今更ではありますが、小平を人工芝にするのは他ならぬ現役部員たちだというのが私の結論です。この PJ に勢いを与え皆が頭を悩ましている資金的な裏付けを確保するのは、やはり当事者たる学生以外に為し得ないのではないでしょうか。今まで OB たちは、様々な「地ならし」を進めてきました。次のフェーズは学生たちが ”お金を出してくれるのは OB だし、結局 OB の決定次第” という気持ちを捨て、どうすれば早くグラウンドを人工芝にできるか、どうすれば沢山の OB がお金を出してくれるか、頭と脚を使って動き出すタイミングだと思います。勿論 OB が前面に立つ必要がある場面もあるでしょうから、OB・幹事会メンバーが、ここで仕事を放り投げるつもりはありません。結果はどうなるか分かりませんが、最後まで一緒に検討・準備し、サッカー部の歴史に新たな 1 ページを刻みましょう。

＊平成21年（2009） 秋季最終節 vs 日大商学部戦後　於小平グラウンド＊

６番の選手が小生。この日の打ち上げ後、部内でインフルエンザが蔓延。
マスクをしている彼のせいだったのでは・・・今では良い思い出ですが。

学生側からの想い

田中 克弥 （４年 主将）

18 分の４・・これが何の数字かお判りかと思います。
2014 年シーズンの私たち一橋の全試合において、ホームで行われた試合の割合です。たったの４試合しか小平でリーグ戦を行うことができませんでした。東京都大学サッカー連盟がホーム&アウェイを推奨していることを考えても、いかに小平でリーグ戦が行われる割合が低いかということがご理解いただけると思います。2013 年シーズンは８試合（同じく 18 試合中）を小平で戦いました。昨年ＧＭの川副が予想していた通り、小平でリーグ戦が行われる数は確実に減少傾向にあります。これは当然、小平が土のグラウンドであることが原因です。今やリーグ戦は、そのほとんどが人工芝で行われています。2014 年シーズンの東京都２部に所属していた大学の内、所有するグラウンドが土である大学は一橋大学と上智大学のみです。東京都１部リーグでは東京経済大学のみが土のグラウンドです。

人工芝化の必要性は、ここ数年、より一層高まってきているのではないかと思います。
３部から２部に昇格したことが主たる要因です。より高いレベルを目指す上で、人工芝化は避けられない問題だと肌で感じることができました。それを文字通り身を持って経験された諸先輩方が現在続々とＯＢとなり、人工芝化への想いを強く持たれていることは、この計画を進める上で大変な推進力となるのではないかと思います。もちろん自分自身も、そこに加わり力となりたいと考えております。また近年リーグ戦に足をお運び頂き、試合を観戦されたＯＢの方々も、人工芝化に対して同じような想いをお持ちではないかと思います。小平グラウンドの人工芝化という問題は、差し迫った事実である、ということです。

2014 年度は人工芝化に対し、実際に行動を起こし始めた年であったと思います。
大学側との会議やクリムゾン（一橋アメフト部）のＯＢ会代表も含めた酉松会の会議も開かれました。私自身、それらの会議等に何度か参加させていただきＯＢの方々が現役のために真剣に人工芝化を進めておられることを感じることができました。しかし同時に、この計画の停滞感を感じていることも否めません。もっと全体を巻き込んだ行動が、今必要とされているのではないでしょうか。人工芝化が必要であるという議論はもう終わりました。次はどう人工芝化するか、です。そして行動が必要です。人工芝化は一朝一夕でできるような簡単な計画ではありません。それ故に、今行動をとることの重要性は日に日に高まっていると思われます。酉松会だけでなく現役にもできることはあります。人工芝化の必要性を最も強く感じている現役が酉松会が動いてくれるのを黙って見ているだけという矛盾した状況を、昨年自分自身、自覚しておりました。
今や人工芝化計画は、現役・ＯＢ含めた一橋ア式蹴球部全体が関わる巨大プロジェクトになるべきではないでしょうか。そうでなければ、実現は不可能と考えて問題ないでしょう。本当に難しいプロジェクトだと思います。私も、そのプロジェクトに関わる一員として力になりたいと考えております。未来のア式蹴球部のために。

⚽ 関東リーグへの挑戦 ～ 序章

赤星 真一 （平４卒 監督）

東京都１部まで昇格し、何年かに１度は関東リーグ昇格を懸けた大会に出場できるチームになるという目標は、自分達の力で到達できないほど高いものでしょうか。（中略）４年間で到達できる最も高いレベルまで学生選手たちが想像力を広げられるならば、ここから数年を強いチームへの通過点にできるのだと思っています。

これは「No bird soars too high, if he soars with his own wings.」と題して、
酉松会新聞の第３号に寄稿した文章の一部です。書いたのは、東京都３部で２年連続して
昇格に失敗した５年前のシーズン後で、当時ご覧になった方は３部も脱出できないのに
関東リーグとは……と思われたかもしれません。

さて、昨年の最終結果は６勝１分 11 敗、勝点 19、東京都２部８位。
最終節に勝てば１部昇格というところまで迫った前年の成績に大きく及ばず、辛くも３部降格を
免れたというシーズンでした。崖っぷちを背にプレッシャーのかかる厳しい試合を強いられ、
勝敗を分ける僅かな差の重みや、それが分かっていても日々のトレーニングや試合の 90 分に
最大限の力を注ぎ続けることの困難さを、現役選手達はイヤというほど味わったでしょう。
それ自体もチームの経験値を大きく上げたとは思いますが、より重要なことは１部昇格だけでは
なく、更に先を見据えた姿勢が、昇格争いが遠くに霞む中でも、それほど揺らがない位にまで
チームに浸透してきたことにあると考えています。

プレー面から触れると、ここ数年でレベルアップしている点として、相手に囲まれた状況での
ドリブルやごく短いパス、コンタクトを伴うボールの奪い合い（１vs１から複数人同士まで）など
狭いスペースや相手と競り合う状況での対処能力が挙げられます。練習試合などで１部のチーム
相手に苦しめる、互角に渡り合うといった時間帯を少なからず作れていますし、馴染みある
他チームの監督・コーチの幾人かから一橋が変わった点として指摘されてもいます。

この面での進歩は、３部に比べて格段に時間とスペースの余裕が少ない２部での試合を
単に重ねたからではなく、学生達自身がより高い基準で強いチームを追求するべく、公式戦は
もちろん練習試合やトレーニングでも重要な要素と位置付けて取り組んできた成果だと言えます。
加えると、リーグ戦が春・秋シーズン制となる中でも、それ以外の試合を相当な数で増やして
いることが、公式戦の出場機会が少ない選手を含めて、個々人のレベルアップとチームとしての
徹底に繋がっていると思います。

これ以外にも各シーズンの主将・GM・選手・マネージャーたちの
様々な努力があってこそですがこの 3 シーズンで強いチームへの下地が浸透し、
5 年前に書いた“通過点”を越えつつあると私は捉えています。

今回の大それたタイトル「関東リーグへの挑戦」は、
この言葉を「遠い目標」とか「夢」という事ではなく、学生たち自身が「意志」として
持てるようになったならば、強いチームへと向かって歩み始められるだろうという意味で、
10 年以上前から心の片隅に置き続けているフレーズです。

そのシーズンに、関東リーグへ挑戦できる東京都 1 部で開幕を迎えることが
スタートラインだとして、今はあくまで序章に過ぎませんが、今回このような紙面に記しても
良いのかもしれないと感じさせる現役チームの「意志」が確かならば、程なくして本編の
ページが開かれることと思います。

★2013 リーグ戦の風景より

上左：選手とコミュニケーション（玉川大 G）
上右：戦況を見つめる（学習院大 G）
下左：ハーフタイムのベンチで（小平 G）

自分との戦い

田中 克弥 （４年 主将）

2014 年シーズン、僕らが成し遂げたことは何もありません。
結果だけ見ても、ここ数年で最低のパフォーマンスだったと思います。
唯一東京都２部リーグに残留し、後輩に来シーズンも思う存分活動できる環境を残せたことは成果と言っていいものかもしれません。昨シーズンは春・秋通して苦しい戦いの連続でした。常に窮地に立たされた状況で試合をしなければならなかったのは、チームを引っ張る立場にある自分の未熟さにあったと思います。後輩たちには、苦しい思いをさせてしまいました。ＯＢの方々にも、多大なご心配をおかけしてしまったと感じています。様々な形で私たちのチームを支援してくださった方々に対し、本当に申し訳ない気持ちで一杯です。

なぜ昨シーズンが苦しいシーズンになってしまったか。
振り返った時に最も思うのは、チームの状態に常に波があったということです。昨シーズンの連勝は１度しかありませんでした。それも２連勝です。前期には、勝った後に負け勝った後に負けるという状況もありました。また試合内容自体も、大量得点する試合もあれば逆に大量失点してしまうケースも同様にありました。これは 2014 年の一橋ア式が未熟なチームだったということを、端的に示しています。それは経験が最も豊富な我々４年生が、チームをうまく引っ張ることができなかったということです。

常に自分との闘いでした。いかに自分の本気と向き合うのか、そして自分に打ち勝てるのか。チームの状況が悪くなればなるほど、自分の不出来さや至らなさにストレスを感じ、視野が狭くなっていきました。チーム全体への視点が圧倒的に欠けていたと思います。チームの為に自分がどのような役割を担うべきか、そういう行動を、もっともっとしなければならなかった。昨年は、この４年間で最もそういう意識を持てた１年でしたが、１部昇格には到底見合うものではありませんでした。結果が雄弁に物語っています。ただ秋のリーグでは、チームで戦えている、そして自分自身、このチームでサッカーができることに喜びや誇りを感じることができた瞬間が何度もありました。４年間で最も充実した時間でした。この感覚を味わえた選手は、他にもいると思います。この感覚が、おそらく 2015 年シーズンを戦って行く上で、チームを根底から支えるものになるのだろうと考えています。

最後に、いつもチームを支援し応援して頂いたＯＢの皆様には大変お世話になりました。感謝しております。特に試合会場に何度も足をお運び頂き、また常にチームのことを気にかけてくださった緒方会長に厚くお礼申し上げます。そして４年間を共に闘ってくれた先輩・後輩・同期には感謝してもしきれません。皆んなのおかげで自分の弱さを自覚することができました。人に恵まれた４年間であったと思います。これからはＯＢとして、また別の形で一橋ア式蹴球部に関わり、恩返ししていきたいと思います。本当に、ありがとうございました。

本気

小泉 武広 （4年 GM）

2010 年 7 月 25 日、僕は高校サッカーを引退しました。目標としていた相手に目標としていた所まであと 1 勝というところで負けました。この悔しさを晴らしたい。その思いから大学でも部活でサッカーをすることを決めました。2013 年 10 月 27 日、1 部昇格まであと 1 勝という所で負けました。来年は必ず昇格する・・その思いで始まった 2014 年シーズンでしたが、結局、最後は残留争いで 8 位に終わりました。高校サッカーの悔しさを晴らしたいと思っていたにも関わらず、大学サッカーも悔しさばかりが残る結果となってしまいました。しかし高校サッカーの悔しさと大学サッカーの悔しさは、どこか違います。大学サッカーの悔しさは不甲斐ない結果に終わってしまったことだけでなく、結果が出なかったことを納得している自分がいることです。それは 4 年間の自分の取り組みが本気でなかったからです。

みんなは、どのレベルを本気の取り組みと考えますか？ あくまで僕の考えですが、努力しようと考えているうちは、まだまだです。本気で取り組もうと意識しているうちも、まだまだです。誰もが認めるほど練習していたとしても、自分を律してやっているレベルだとしたら、それはストイックに頑張っているだけであって、本気ではないと僕は考えています。本当に本気な人は、心が体を動かす状態で湧き上がってくる情熱が、自分を突き動かしてくれます。そして目の前のことに、ひたすらに夢中になっていると思います。

4 年間の中で僕は、そのレベルでサッカーができていた時間が少なかったと思います。それが原因で達成できなかった目標は山ほどあります。4 年間を振り返ると最初に出てくる思いは、そのことへの後悔です。逆に 4 年間で自分の糧になった経験もたくさんあります。並木さんや大儀見さんをはじめチームを支援してくれる方や、チームメイトが与えてくれたものがほとんどですが、個人レベルの話をすると、チームやサッカーに対する純粋な思いが自分を突き動かしてくれた結果生まれたものです。僕が 4 年間の中でこのチームとサッカーに本気で向き合い、夢中になれた時間はわずかでしたが、そこから得られた経験は一生残るものです。だからこそ後輩のみんなには、このチームで経験することに本気で向き合い、夢中になってほしいと思います。誰もがこのチームやサッカーに対して純粋な思いを持っています。その思いを大事にして、それを情熱に変え、チームのために発揮してください。みんななら、必ずできます。

今年は結果を出すことができませんでしたが、後輩たちは大きな成長を見せてくれました。
公式戦に出る選手だけでなく、公式戦になかなか出られない選手からマネージャーまでチームやサッカーに対する姿勢に成長が見られたことは、GM をやっている中での一番の喜びでした。
特に大きな成長を見せてくれた部員が何人かいますが、彼らはチームがやろうとしていることに対して本気で向き合い、夢中になってやってくれました。そんな後輩たちの、これからの成長がすごく楽しみです。これからも部活に顔を出して、みんなの本気と、夢中になって 1 部昇格に向かっていく姿を見に行こうと思います。

最後の最後まで応援してくださった OB の皆様、本当にありがとうございました。
来年はさらに多くの方が会場に足を運び、現役の本気を観に来て頂ければと思います。
僕も OB として 1 部昇格を支援します。
OB の皆様も現役部員も、またグラウンドでお会いしましょう。

振り返りたくもない

蝦子　樹　（４年）

４年間のア式蹴球部での生活を振り返ったときに悔しさと情けなさが最初に浮かびます。結局試合に出られなかった、結局自分の力でチームを勝たせることなんて一度も出来なかった。確かに１年生の頃は試合に出ました。２部昇格を果たしました。しかし当時１年生だった自分が、どれだけチームに貢献できていたでしょうか。たまに会う先輩から感謝の言葉を頂くことはありますが、それでも、あの昇格に僕の力が必要不可欠だったとはとても言えません。そして２部で戦うシーズン、“今度こそ自分の力でチームに勝利を”という気持ちで開幕に挑みました。しかし、僕を待っていたのは怪我と挫折。怪我自体には悔しさも情けなさも感じていません。ただ、怪我をして心が折れた自分が情けないし、悔しい。そこから先は振り返りたくもありません。３年で昇格を賭けた最終戦の後半に出場し、自分の２失点で負けて昇格を逃しました。４年ではとうとう１試合もリーグ戦に出場することができずに終わりました。自分の弱さを認められず、いつか良い方向に向かうだろうという生半可な気持ちで過ごした時間が、僕に何かを残すことはありませんでした。

引退してからの１か月間、僕はずっと、こんなことを考えていました。
“この４年間で、僕は何を得たんだろう”と。
どれだけ考えても答えが見つかることはありませんでしたが。

そんな中で行った追いコンで、１つの答えを見つけました。
尋常じゃないほどの浪費を重ねた１日目の終わりに飲み会がありました。そこにあったのは、次のシーズンの抱負について語る後輩たちの姿でした。この３年間、新歓担当として活動し、多くの後輩たちが入部してくれました。そんな彼らがすっかりチームの一員となり、チームの勝利のためにどうすれば良いかを考え、語り合っている姿を見ているのが楽しくて、次の日に影響が出るくらい飲み過ぎてしまいました。そして、こんな風に思えるようになりました。
“確かに自分には何も残らなかったかもしれない。それでもチームには何かを残せたのではないか。そして、それはそれで良いのではないか”と。

最後にはなりましたが、この４年間ご支援をくださったOBの皆様にお礼と謝意を申し上げて拙文を終えようと思います。新歓・広報担当という仕事柄多くのOBの皆様と関わる機会を持ちました。原稿送付・HP対応の遅延やお仕事の依頼など、ご迷惑をおかけしたことも多々あったことと思います。そんな中でも寛大に許して頂き、仕事も快く受け入れて頂いたOBの皆様には感謝の言葉しかありません。その他にもお忙しい中、試合の応援に来てくださったOBの皆様、会費という形で部をご支援くださったOBの皆様など、多くの方々に支えられてサッカーをすることができました。本当にありがとうございました。これからは僕もそんな皆様と同じくOBの１人としてチームを見守っていきます。

次世代への期待

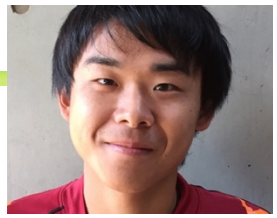
野村 修斗 （４年）

自分が最上級生としてチームを引っ張ったこの１年間は、とても辛い１年間でした。今年こそは昇格してやろうと意気込んで、自分の中では驚くほど頑張ってはいたのですが、結果を出すことができませんでした。うちの代のポンコツ６人が結果を出すには１年間という期間はあまりにも短すぎました。色々と困難が押し寄せて、悩んで苦しんで、４年の６人と３年のマネージャー2 人が、ようやく少し強くなれたかなという頃にもう引退という感じです。まだまだ情熱の足りなかった下級生の頃のツケが回ってきたのだと後悔しています。

とまあ、そんなことよりも、僕は来年以降のチームに、ものすごく期待しています。
２部に上がって３年間僕が見てきたチームは人数が少なく、技術のある選手がそろっているわけではないチームで、なんとか工夫して勝とうとしていました。自分たちが２部で勝ち上がるには「番狂わせ」を起こす必要があると考えている人が多かった印象です。来年以降は、そこが変わると思います。僕たちの１コ下からは２部に上がってから新歓を受けた世代であり、各代の人数も多く、質の高い選手がそろっています。そして何より、純粋にサッカーがうまくなりたいという本当に強い情熱を全員から感じます。次は４度目の東京都１部昇格への挑戦ですが、サッカーの真っ向勝負で、確かな実力で、２部の頂点を取ってくれることでしょう。そこから１部の舞台、関東の舞台へと、よりレベルの高いフィールドで一橋らしい「番狂わせ」を起こしてくれることを期待しています。

最後になりますが、この１年間チームを応援し続けてくださった OB の皆様、
本当にありがとうございました。今後とも現役のご支援をよろしくお願いします。
今後は自分も OB として、何とかこの部に恩を返していこうと思っております。

器と理想



満井 一成 （4年）

2014 年 10 月 26 日、大学サッカー人生が終わった。
結果は 10 チーム中 8 位、今シーズンが始まるときに掲げた「都 1 部昇格」の目標を完遂するには至らなかった。それどころか降格争いを強いられることになり、不甲斐ないという意識もあった。それでも全力で目の前の試合、練習、日常生活に向き合い、2 部残留を何とか決めたときには安堵感と達成感を覚えた。確かにサッカーに真剣に打ち込むことができた、充実した 4 年間であったと思う。特に最後の年は、自分の全てをサッカーに打ち込んだつもりだった。自分がうまくなること、チームがより良くなることを常に考えて行動してきたつもりだった。しかし、いくら努力しても、どんな過程を踏んでも結果を残さなければ意味がないと、シーズン当初のブログに綴った通り、最終的に自分は敗者であった。

確かに今シーズン自分が掲げていた目標は、自分の実力を考えれば、
いささか無謀なものと思われても仕方なかった。前年度まで試合に殆ど絡まなかったくせに、うまくなって昇格の原動力になるなんて夢にすらならないと思われても仕方なかった。自分の“器”には大きすぎる目標だったのかもしれない。今振り返ってみると自分の大学サッカー人生は、与えられた“器”に入れる“中身”の理想を追い求めてきた 4 年間だったのかもしれない。サッカー選手として、人間としての自分の理想を追い求め、自分の“器”を無視して突き進んだ結果、最終的には敗者として 4 年間を終えることに繋がったのかもしれない。具体的に言うなら自分の武器であり、理想であったドリブルを捨て、よりチームに尽くせる選手を目指すことが自分の“器”に相応しく、異なる結果をもたらしたのかもしれない。結果のために自分を見つめられなかった、自分の“器”を測りきれなかった、いや正直薄々感じてはいたけれど理想を捨てきれなかった自分がいる。このように考えると、結局シーズン最初のブログに書いた決意とは異なり、自分は結果よりも理想を選択し、敗北したといえる。しかし理想を諦めなくてよかったと思っているのも事実だ。最後まで理想の方法で結果を出すことに拘り、貫くことは苦しかったけれど、エキサイティングでもあった。本当に充実していた。だから確かに結果に対する後悔の念は強いが、本当に楽しい月日を過ごすことができたことを考えると、決して間違った選択ではなかったとも思う。

これからの人生も自分の“器”と理想を照らし合わせて物事に挑戦していくことになると思うし、理想か結果かという問いは簡単なものではない。だが、少なくとも大学サッカーにおいては、理想を追求し、苦渋を舐めつつも充実した日々を過ごすことができたことに満足できた 4 年間であった。

四年間を終えて

宮村 開人 （4年）

2011年：東京都3部 2位 → 2部昇格
2012年：東京都2部 7位 / 2013年：東京都2部 4位 / 2014年：東京都2部 8位

まずは自分が入学してから着実にステップアップしてきた一橋ア式蹴球を、
自分たちが最高学年の代になって後退させてしまったことを、応援してくださっている
OBの皆様、来年以降もこのチームで戦っていく後輩たちに申し訳なく思っています。
今年のチームの結果は自分たちの4年間の活動の結果であるので、
足りなかった部分については受け止め、今後の自分の人生に活かしていきたいと思います。

去年のシーズンが終わったあと、自分は4年になってもプレーをするかについて、
とても悩みました。同期との話を経て、最終的には最後まで自分が一番好きで、ここまで続けてきたサッカーを続けることを選びました。結果としては、今シーズンは度重なる怪我のために合わせて4ヶ月近くサッカーをできない期間があり、リーグ戦のメンバーに入ることもなく個人としても後悔ばかりが募るシーズンとなりました。またプレー以外でも、6人しかいない最高学年の1人としてチームをまとめ引っ張っていかなければならない立場にありながら、特に春季ではなかなか本当の意味で一丸となって戦うチームを作ることができず、歴代の先輩たちと比べても自分の不甲斐なさに腹が立ったことが多かったです。しかし、リーグ戦中断期間には後輩たちとも話し合い、無理に先輩たちと同じようにするのではなく、自分のできる方法でやるしかないのだと気がつきました。まず自分がしたいプレーを目指すこと、1プレー1プレー後悔しないプレーを選択すること、プレー以外ではメンタルユニットとして、一橋大学ア式蹴球部の一員として、やった方がいいと思うことをすること、それだけを考えて過ごすことにしました。チームとしても個人としても望んでいた結果を得られたわけではないですが、最終節が終わった時に、4年前の入部の決断を後悔することなく終われたことにつながったと思っています。

後輩たちに伝えたいことは、4年の間には迷い悩む時期もあると思いますが、
自分で考え、あるいはチームメイトと話し行動していけば、必ずサッカー部員として活動していく楽しさや喜びというものが見えてくるはずです。最後までやり抜いて欲しいと思います。

最後になりましたが、僕らの活動を支えてくださったOBの皆様、
指導してくださった赤星さん、僕を時に怒り、時に励まし、気にかけてくれた先輩方、
力不足な僕にもついてきてくれた後輩たち、
忙しい中グラウンドに来て僕らと関わってくださった、並木さん、大儀見さん、望月さん、
そしてサッカーも下手で、それ以外でも迷惑をかけっぱなしだった僕を見放さず、
共に過ごしてくれた同期に感謝しています。
ア式蹴球部は引退しますが、今後共よろしくお願いします。

ア式蹴球部の一員として

橋本 安未 （3年 MGR）

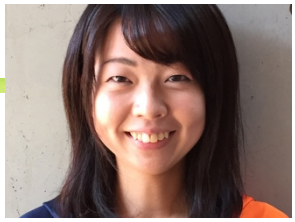
サッカー部に入ってからの３年間、私は非常に貴重な経験をさせて
いただいたと感じています。小平のグラウンドで暑い日も寒い日も雨の日もサッカーをする
みんなの真剣さ、チームで戦うことの難しさ、チームのために仕事をすることのやりがい。
そして何といっても試合に勝ったときの、みんなの笑顔、喜び、嬉しさ。
あの瞬間は、私の一生の宝物です。今思い出しても感動します。

チームから離れて感じた事として、部活をやっているときの緊張感が
今の自分にはないということです。当時は気づかなかったことですが、週５日、私は戦うという
気持ちを持って部活に行っていたのかもしれません。実際にはプレーしない立場のマネージャー
ではありますが、こんなにチームに入れ込める環境で活動できたことがどんなに幸せだったか、
今になって実感しています。プレーヤーとマネージャー、スタメンと応援、みんなが立場に
関係なく、チームのことを考えて一生懸命になれる、このサッカー部が私は本当に大好きです。
このチームの一員になれてよかったと心から思っています。だからこそ、昨シーズン昇格でき
なかったことがとても悔しいです。初めて残留するかもしれない、ということを考えながら
リーグ戦を戦いました。敗戦後の、あの円陣の雰囲気は、今でもはっきりと覚えています。
なので、今年こそは１部昇格を実現してほしいです。

私たちの代は３年間、昇格を逃し続けてきました。
もうみんなの悲しい顔は見たくないです。みんなの喜んでいる顔、楽しくサッカーをしてる
顔を見るために応援に行きたいと思っています。昨年とは関わり方は変わりますが、
今でもサッカー部の一員であるという思いで、みんなと一緒に戦いたいと思います。

最後に、ホーム・アウェイ関わらず、そして悪天候のときでも応援に来てくださり、
あたたかいお言葉をかけてくださったOB・OGや 保護者の皆さま、
本当にありがとうございました。今シーズンも応援よろしくお願いします。

未だ見ぬ舞台を夢見て



渡邊 りお （3年 MGR）

最初にお礼を述べさせてください。
サッカー部で過ごした３年間は、今振り返ってみるとあっという間でしたが、とても充実感に溢れ、非常に成長できた時間でした。そんな部活生活を送ることができたのは、他でもない周りの支えがあったからです。時に厳しく、時に優しく導いてくださった先輩方、同じ時間を過ごしてきた同期、懸命に努力してくれる後輩のみんな、毎週試合会場にまで足を運んで下さるなど、現役を積極的に支援してくださる OB・OG の方々、そして辛い時に支えてくれた友人、遠い地元からエールをとばしてくれた両親、本当にありがとうございました。

この３年間を振り返ってまず思うのは、サッカー部を選んで本当に良かったということです。まだ仕事をこなすのに精一杯だった１年目、合宿で先輩方の熱い想いに触れて、早く一人前のマネージャーになりたいと思っていました。チームの一員としての自覚が芽生えた２年目は、チームに貢献したいと必死でした。勝利の積み重ねが転じて、思うようにいかなかった後半、そして残留、次のシーズンどうしていけばいいのか、本当に不安で仕方がありませんでした。３年目、一番上として迎えたシーズンは、本当に辛く険しい道のりでした。チームとしてうまくいかない時期や、個人として自分の指針を見失いかけたこともありました。最終節の武蔵戦は、すべてをかけた試合でした。結果は悔しいものとなりましたが、そこにみんなの想いが全部つまっていて、わたしにとって３年間で一番感動した試合でした。この部で過ごした３年間は、他の何にも変えられない尊い時間です。

一方で、チームに対してずっと考えていたことがあります。
私たちから下の代は昇格を経験したことがありません。だからでしょうか、どんなに昇格したいと思っていても、どこか挑戦者意識で、自分たちに自信がなかったように感じています。
１部に名を連ねるのは強豪校ばかりです。昇格するということは、自分たちが次のシーズンは１部で戦うということです。そのイメージがもっと具体的になり現実味を持って感じられたとき２部を戦う上で、もっとやれるチームになるのではないでしょうか。

最後に、わたしは同期がどんなにこのチームが好きで、努力する人たちか知っています。
後輩たちの想いや頑張りも見てきました。未だ見ぬ舞台を夢見て全力で駆けていく、
これからのサッカー部を本当に応援しています。

平成 27 年度シーズンに向けて

挑戦と創造 ～ 1部昇格を目指して ～

金田 大樹 （3卒 新 GM）

OB・OG の皆様、日頃より一橋大学ア式蹴球部をご支援いただき、
誠にありがとうございます。昨シーズンの結果報告ですが、
春の総理大臣杯予選が 1 回戦敗退、東京都 2 部リーグ戦を 6 勝 1 分 11 敗の 8 位、新人戦が
都ベスト 16 という残念な結果でありました。幸いにも 2 部リーグに残留することができました
ので、今シーズンは 35 年ぶりの 1 部リーグ昇格を目標に、東大戦も含め多くのゲームで勝ち点
3 を取り、応援してくださる方々に熱い試合・戦いで恩返ししていきます。また今シーズンは
リーグ戦以外に B・C チームは I リーグ、サタデーリーグ、国公立戦に参加します。できる限り
多くのカテゴリーでタイトルを獲得できるようチーム一丸となり頑張っていきますので、
そちらの方も応援よろしくお願い致します。

今シーズンは 1 月 20 日をシーズンインとし、けが人も数名いる中ではありますが
トレーニングを開始いたしました。2015 シーズン、チームスローガンは「挑戦と創造」です。
新 4 年で決めたこのスローガンには、強い意志を持ち、常に挑戦し、創造しようとする姿勢で
いることをチームとして大事にし、1 つ 1 つの物事、行動に対して強い意志を持って取り組み、
「挑戦と創造」といった形で表わすこと、また 3 年連続 2 部残留、昨季の残留争いを経験し、
今季は 1 段階上の成長が必要だということ、そして、この「挑戦と創造」を個人として、また
チームとして行うことが必要だと考えました。この「挑戦と創造」を 1 年間追求し、体現して
いきたいと考えております。

今季のサポート体制については昨シーズン同様、赤星監督とフィジカルトレーナーの並木さま、
メンタルトレーニングコーチの大儀見さまに支援していただくと共に、非公式ではありますが、
日本代表 U-16 テクニカルスタッフの酒井清考さまにも月 1 回程度サポートいただくことに
なりました。悲願の 1 部昇格を成し遂げることが、今季チームにとって、そして僕にとっての
「挑戦と創造」です。今シーズンで 2 部での戦いが 4 年目になりますが、まずは自分たちが
2 部でサッカーができるということに喜びを感じ感謝の心を持つと共に、常にチャレンジャー
であることを忘れず、謙虚に、ひたむきに努力し結果を残していきたいと思います。
一橋大学の名に恥じないよう一生懸命戦いますので、OB・OG の皆様にはこれからも変わらぬ
ご支援をお願いすると共に、是非一度グラウンドに足を運んでいただき、僕らと一緒に闘って
いただければ嬉しいです。また 3 月 10 日の OB 総会で多くの方々とお会いし、想いを共有
できたら、現役としてもうれしく思います。多くの方の総会へのご参加をお願いすると共に、
今後とも一橋大学ア式蹴球部の活動に、ご支援ご協力をよろしくお願いします。

関東酉松会（シニア）有志の会

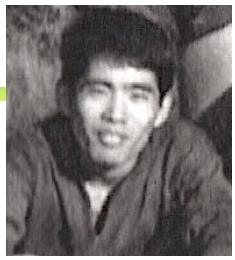
松丸 鉱市 （昭 31 卒）

平成 26 年は、サッカーW 杯決勝も終わった 7 月 16 日に、シニア有志 8 名が一橋クラブ「梧桐の間」に集い昼食をとりながら歓談する、この会が開かれました。出席者は、神代（昭 29)、石井・高田（昭 30)、志摩・橋本・松丸（昭 31)、浅井・佐竹（昭 32 年）の各氏です。前年同様、神代・佐竹の両氏がそれぞれ山口・大阪からの遠路参加組です。このメンバー全員は、同じ時期・場所で一緒にボールを蹴りあったことがある仲間でもあります。

W 杯について、世界各国の試合ぶりに加えて、日本が決勝トーナメントへの進出が果たせず、相変わらず本番では弱いことが話題になりました。各人の近況として、まだサッカーの試合に機会をみて出ていること、道路で子供とボール蹴りをして怪我をしたこと、昔の怪我で階段を降りるときなど足の感覚がおかしいこと、また年相応とはいえ体のあちこちに生じた変調への対応や体力メンテナンスに、いかに注力しているかなど個々の報告がありました。

平成 27 年も夏前にこの会を開く予定です。参加者の都合などを考慮したうえで日程をセットします。有志皆さんの是非の参加を期待する次第です。

関西酉松会のご報告 ～ 三商大戦への思い ～



柴田　暁　（昭 46 卒 パナソニック）

◆春の部（4 月 23 日）参加者

神代（昭 29 卒）、中岡（昭 31 卒）、嶋田・佐竹（昭 32 卒）、
村林（昭 40 卒）、柴田（昭 46 卒）、水谷（平 4 卒)

◆秋の部（10 月 25 日）参加者

神代（昭 29 卒）、中岡（昭 31 卒）、嶋田・佐竹（昭 32 卒）

本年は、関西での三商大戦もなく、春秋とも静かな懇親会となった。
秋の参加は僅か 4 名であったが、丁度、神代キャプテンが 4 年生の時の 2 年生と 1 年生がそろったので、当時の昔話に話が弾み、また母校現役チームのリーグ戦での苦戦状況や更には日本Ａ代表の不振状態とか話は盛り上がったそうです。

秋は、私は北京出張と重なり出席できず、記事が少なくなりましたので、
若干追加したいと思います。北京滞在の 1 週間はＰＭ2.5 の影響で、ひどい日には視界 300 m という状況。これでは子供たちが外でサッカーという状況ではありません。2014 年の話題はW杯ですが、ドイツの第 1 戦 vs ポルトガル戦はドイツ出張中で、ハンブルクのレストランで、ドイツ人とＴＶ観戦し、ミューラーのハットトリックでドイツ圧勝、大変な盛り上がりでした。
翌日、会議の私の最初の一言は、「ドイツは必ず優勝する！」。
下の写真は、その時ドイツ従業員たちと撮ったものです。

７月W杯直後の中米パナマでの会議では、出場国のメキシコ、コスタリカ、
コロンビア、チリ、アルゼンチン、ブラジルからも出席者があり、夜の懇親会では
「中南米の出場国はすべて１次リーグを突破し、平均レベルでは欧州より遥かに高い」と
激励したものの、サッカーの話は余り盛り上がりませんでした。

実は、私は 16 年の中南米駐在経験があり、内心は中南米の国、
特にアルゼンチンに優勝して欲しかったのです。同国にも何回か行っておりますが、
特に 2001 年の債務危機以降、経済が低迷し、サッカーのできる環境も随分悪くなったように
思います。MEXICO ‘86 でのあの感動をもう一度味わいたかったものです。

又、国内での話題はガンバ大阪の三冠達成ですが、この続きは
次回の関西酉松会 ４月 23 日（木）18：30、関西文化サロンにて話したいと思います。
是非ご参加をお願いいたします。

世界を股にかけてサッカーを楽しんでます

吉岡 基夫 （昭 49 卒 在ロンドン）

私は昭和 49 年に卒業後住友商事で勤務し、現在住友商事の合弁会社のロンドン支店で顧問として勤務しています。間違いがあると思いますが、色々な国で経験しました私のサッカーとの出会いをご紹介したいと思います。

ドイツ時代 1964 年 8 月から 1966 年 8 月まで父親の勤務の関係でドイツのハンブルグに行きました。欧州ではプロのリーグ戦のテレビ中継がないのに驚きました。ナショナルチームの試合と欧州選手権の試合は全試合中継がありました。サッカーの番組はゴールシーンを中心としたハイライトニュースと試合前の評論家の解説が延々と放送されます。これは今も変わりません。とてもサッカーは盛んで欧州選手権をユーロビジョンの中継で観るのが楽しみでした。当時ドイツ代表の CF ウヴェ・ゼーラーという選手がハンブルグ SV に所属していて応援をしにたまに巨大なサッカー場に行きました。残念ながらハンブルグ SV は今も余り強くありませんが当時も大したことはありませんでした。ドイツ代表の試合は印象に残っています。1965 年にベッケンバウアーが 18 歳で代表デビューし、ゼーラーとワンツーパスで抜け出してゴールを決めたときは熱狂しました。1966 年の W 杯ではドイツが優勝すると思っていましたが、イングランドに延長で負けて悔しかったです。学校はインターナショナル・スクールでした。英国人の担任の先生はプロになろうかと言うほどのサッカー好きでしたので日曜日に 2 部リーグの FC ザントパウリというチームの試合を観に連れて行って頂きました。サッカーの最も面白いのは最初の 15 分だとか、五分五分に見えるがボールに対するアクションがこちらのチームの方が早いなど色々と教えて頂きました。

フランス時代 1982 年から 1984 年までパリで勤務しました。
ちょうどミッシェル・プラチニがサンテチエンという田舎のチームからイタリアのジュベントスに移籍して活躍し始めた頃です。リバプールとジュベントスの欧州クラブ選手権決勝の日、早く仕事を終えてテレビを観る計画でしたが忙しくて残念ながら試合が終わる頃まで会社にいました。帰宅してどちらが勝ったのか結果を観ようとテレビをつけたら、まだ試合が始まっていませんでした。フーリガンの為に大勢の観客が死亡する大惨事になっていたのです。試合は中止かと思いましたが、その後試合が始まったので驚きました。この試合はプラティニが PK を決めジュベントスが優勝しました。82 年スペイン W 杯の時のフランス代表は、プラチニ、ティガナ、ジレスの 3 人の中盤が豪華メンバーで強かったのですが、その後ジダンが出るまで長く低迷しました。

象牙海岸共和国 1992 年から 1994 年まで象牙海岸共和国のアビジャンで勤務しました。気温は最高 35 度程度でしたが、最低気温が 27 度程度と年中汗をかいている気候ですので、サッカーの試合もずっと走っている訳にはいきません。ちんたら走って、ここ一番のときに身体能力の限りを競い合うという経験したことのないサッカーの試合を観ました。CK の際に FW は飛び上がってボールが来るのを待っていますが、守る方も飛び上がって待っていますのでゴールにはなりません。この身体能力に洗練された技術が身に付けば、アフリカのサッカーがとても手に負えなくなると思うのですが、何が問題なのでしょうか。試合の結果次第で直ぐに暴動になったりしていましたので試合観戦は避けていましたが、1994 年 W 杯の予選通過が決定するモロッコとの試合がアビジャンでありました。これは命がけで観戦に行きました。会社の運転手全員を招待し、自分の周りに席を取って守ってもらいながら観戦しました。結果は１：０で象牙海岸が勝利しました。幸せな観客は安全ですが、その後、歓喜の踊りが始まって踊りまくられてそのエネルギーに圧倒されました。

パキスタン時代 1999 年から 2004 年まではパキスタンのカラチに駐在しました。元英国の植民地ですがサッカーはマイナースポーツでニュースにもなりませんでした。メジャースポーツは何といってもクリケットでした。グラウンドホッケーも強豪ですが人気はクリケットにはかないません。確かに気温 52 度ではサッカーなんてできません。冷房の効いた自宅で、スカイスポーツのプレミアリーグの試合を楽しんでいました。

英国時代 2011 年から現在まではロンドンで勤務しています。お年を召された皆様は覚えておられると思いますが、昔「三菱ダイヤモンドサッカー」という岡野俊一郎が解説をしていたサッカー番組がありました。そのときに観ていましたトットナム＿ホットスパーズとかウエストハム・ユナイテッドとかアーセナルというチームが今でもプレミアリーグで活躍しています。とても懐かしい感じがします。英国では上位チーム同士が対戦する切符を入手することは極めて困難です。まずファンクラブに所属し、少し買いやすい条件で切符の発売日に発売と同時に申し込み、ようやく入手できるかどうかというような状況です。私は商売柄、平日に切符の入手に余り時間をかける訳にはいきませんので、上位クラブ同士の試合は生で観た事がありません。仕方なく下位チーム同士の対戦を観に行くとゴール前のフリーキックが枠に飛ばない、トラップがお粗末でチャンスが潰れるというような少々期待外れの試合内容でため息が出ます。サッカー場は我々日本人が住める様な環境の場所にはなく、ちょっと信じ難い様な場末にあります。ウエストハムのホームグラウンドのアップトン・パークは最も貧しい人が多く住む東ロンドンのニューアム地区にあります。地下鉄を降りたらインド人、パキスタン人、アフリカ人ばっかりで昔駐在した土地を思い出しました。沢山の親子連れがスタジアムに行き、ホットドッグを食べながらウエストハムを応援しているのは、日本でお父さんが息子を野球場に連れて行くのと同じ微笑ましい光景でした。

問題は下町訛りがきつ過ぎて私の貧弱な英語の実力では会話ができないことと、お父さんが試合に興奮してきて怒鳴る「この売春婦め」とか「私生児め」とか、もっとひどい言葉も出てきて中々教育上いかがなものかと思ったことでした。フーリガンみたいな人は見かけませんでした。でも騎馬警官が大勢スタジアムを取り囲んで警戒していました。チケット代は最高で約 200 ポンド、安くて 60 ポンドします。怠け者ですので、買えない買えそうにないということで、もっぱらテレビでサッカーを楽しんでいます。土曜日の夜 10 時 30 分から 12 時まで名古屋グランパスに巨額の契約金で入団し、ほとんど試合に出ずに帰国してしまったギャリー・リネカーが司会をする「マッチ・オブ・ザ・デイ」でプルミエリーグの全試合をハイライトで観ます。解説はニューキャッスル・ユナイテッドで活躍したアラン・シアラーです。その後 2 部リーグであるフットボールリーグ・チャンピオンシップの試合が延々と深夜 1 時半まで放送されます。日曜の朝 8 時半からはドイツのブンデスリーガのハイライトが観られ、日本人選手が活躍しますので観ていて嬉しいです。チャンピオンズリーグの試合は不定期的に火曜日と水曜日に行われます。夕方 7 時半頃からの試合開始ですので急いで退社しテレビの前に陣取ります。この日はクラッカーとビールで晩御飯ということになります。女子サッカーはスポーツ･ニュースで短時間放映するだけですが、世界選手権はスカイスポーツで中継がありましたので、カジノに行って頼み込んで日本 vs アメリカの決勝の試合をプロジェクターに映して観せてもらいました。

サッカーに出会ったので、大切な仲間と楽しくお付き合い頂いているのが最大の成果ですが、サッカーのお陰で常に身の危険を感じる僻地の勤務も何一つ不自由のない先進国での勤務も楽しく過ごすことが出来ました。これからもサッカーを楽しませて頂きたいと思います。

アメリカで考えたこと

松井 浩通 （昭 63 卒 三菱東京 UFG 銀行 在ニューヨーク）

海外駐在員として米国のボストンに４年９ヶ月滞在、その後ニューヨークに移って、もうすぐ１年になります。ボストンでは、当時小学生だった長男・長女を連れて一家４人での赴任だったため、週末は子供たちのスポーツの練習や試合の送り迎えが父親の重要（？）な仕事でした。サッカーをやるとオヤジが口うるさいと思ったのか長男は野球に夢中になり、小学校高学年から中学卒業までの４年間、地元の野球チームで懸命に球を追いかけていました。そうした中、アメリカ人コーチの子供たちへの指導の仕方が、日本とだいぶ違うことに驚きました。特に小学生の頃は、とにかく「叱らない」のです。

どう考えてもアウトのタイミングで勝手に盗塁しても、
フルカウントで暴投に近いボール球を思いっきり振って三振しても、「Nice Try!」。
ボロボロのスコアで負けても「Good Game!」。
日本だったら監督やコーチから叱られるのではと思うような場面でも、ひたすら褒めていました。
「褒めて伸ばす」と「叱って伸ばす」、どちらが良いとは一概に言えませんが、子供たちを褒めまくっているコーチを見ながら、「もしかしたら、こうして自分のすることを否定されずに育つと、型にはまらない自由な発想とか失敗を恐れないチャレンジ精神が育まれるのだろうか？」などと考えていました。

翻って、学生時代の自分のサッカーを思い返すと、あまり“自由な発想”を持っていたようには思えません。大学では監督もいなかったので、頭ごなしにああしろ、こうしろと言われることはなかったのですが、それでも中学・高校とサッカーをしてきて、「こうしなければならない」「こうすべきだ」という概念ができていて、それに縛られていた部分は多々あったと思います。

勿論、あまり自由奔放なプレーばかりしていては試合に出してもらえなかったでしょうが、時にはセオリーから外れたことをしてみても良かったかなと思います。

最近、一橋サッカー部同期が集まってフットサルを始めたと聞きました。そのうち帰国できたら仲間に入れてもらい“自由な発想”のプレーをしてみたいと思っています。「お前の技量で変なことするな！」とみんなから言われそうですが、そこは是非「Nice Try!」と言って頂きたいと思います。

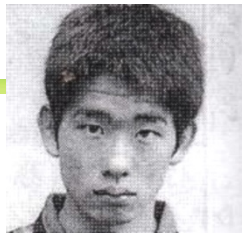
近況

鈒持 隆雄 （平７卒 三菱東京 UFG 銀行 在シンガポール）

シンガポールに赴任して 1 年半が過ぎた。この間、サッカーは極力控えるようにしている。5 年ほど前、別の海外赴任時に勇んで現地のリーグに参加し、肉弾戦主体の欧米サッカーに真っ向から挑んだ結果、試合で肩の腱を断裂。1 週間の職場離脱や半年のリハビリに至った経緯を踏まえ、家族より厳に海外でのサッカーを禁じられているからだ。赴任前は東京で 3 級審判や C 級コーチライセンスも取得し、会社サッカー部の監督までやったのに、当地に来てからの運動は一転してゴルフやジョギング程度で無難に過ごす、はずだったが・・・

昨年 10 月、当地の酉松会でご一緒している朝倉君（平 12 卒）に誘ってもらったことをよいことに、同じく深田君（平 8 卒）、福田君（平 9 卒）と現地のチームに参加し、リーグ戦に出場した。もちろん（前述の事情から）家族にはナイショである。CB として試合に入った。若い英国人の FW が相手だ。球際で競り合う緊張感が懐かしい。やはりサッカーはプレーするに限る。普段の生活では決して分泌されないアドレナリンが心地よい。気づくと職場のストレスは相当のものだったらしい。相手を何度も削ってしまった。自分より軽く 20 歳は若い相手が、怒る。こちらも負けてはいない。“東都ではこんなん序の口だぜ。怒るお前が悪い！” などと揉めていたら、相手にだけカードが出た。審判、ナイス。年功序列が分かってるじゃないか。もとより気温 30 度近い高温多湿下での試合。最初は暑くて倒れるんじゃないかと危惧したが、何とかなってしまった。“俺って、まだイケるんじゃない？” という妙な自信だけ持ち帰り、その素敵な勘違いは今も続いている。勢いをかって 2 ヶ月後の 12 月にはフルマラソンに参加した。次は 120 分の延長戦まで戦えそうだ。体力を蓄えナイショで参加できる次の機会を狙っている。何だかんだ言ってサッカー人としての DNA は、そうそう忘れられないものだ。

サッカーの母国で Kick & Rush



森松 央志 （平 14 卒 三菱東京 UFG 銀行 在ロンドン）

2012 年から約 3 年間英国ロンドンに駐在しております。
言わずと知れたサッカーの母国で、庶民の生活に Football は欠かせないものという国です。
イングランドサッカーといえば何と言っても悪名高い Kick & Rush。今もプレミアリーグでは下位チームが上位チームに勝つための常套手段で、観客も前線での肉弾戦には特にボルテージが上がります。この傾向はレベルが低くなる程強くなり、草サッカーの FW は、ほぼ前に張り付き DF はひたすら蹴って押し上げるを繰り返します。ピッチは一応芝生だったりするのですが、芝生の下は土というより粘土のように固く、細かいパスを繋ごうとすると、かなりの技術が要求されます。この国の Football とは、そういうスポーツらしく、速さと強さを競うもの。プレミアリーグにはうまい選手もたくさんいますが、強い、もしくは速いことが前提な気がします。

私自身も決して上手い方ではありませんが、サッカーはボールを繋ぐものという意識があり、当初はやるのも観るのもかなり抵抗がありました。しかし良く考えれば理にかなった戦術ですしうまい選手は、どんな環境においてもうまくくプレーします。全てはチームが勝つために。
そしてどんなにラフなプレーをしても、試合後にはさわやかに握手で終わる。試合後のパブでチームメートや対戦相手とビールを片手に談笑していると、少しだけですが、古き良きこの国の伝統に触れられた気がします。今週末も、試合後のビールを楽しみに、凸凹のグランドで体力の続く限り Kick & Rush して参ります。現役の皆さんも Kick & Rush はお勧めしませんが、一人一人が色々なところからチームが強くなるヒントを得て、悔いのない日々を過ごしてください。
帰国の折、応援に行くのを楽しみにしております。

自由テーマ

私的サッカー論

高田 勝巳 （昭 30 卒）

現役の 2 部残留は良かった。
主力選手が卒業後のリーグ戦を乗り切った 4 年生諸君はご苦労様でした。
新年度は 2 部残留を生かして新人獲得と 1 部復帰に全力を尽くしてください。
ところでサッカーのプレーに関する私見を述べたいと思います。

サッカーは手を使わない競技のため、ボール扱いは足頭ボデー等を使うことになり（まさに foot-ball)、その結果ボールコントロールの練習が主力となるのは当然と思います。然しサッカーはボールを保持しないと攻撃できません。野球のように 9 回攻撃の機会が与えられている競技と全くルールが異なるスポーツです。従ってゲームの本質はボールを奪い合うゲームと言い得ます。この観点に立てば練習内容としてボールコントロールとボール争奪は同じ扱いをする必要があると思います。ボール争奪力を向上するには豊富な運動量と的確な判断による鋭い出足、体の使い方（手を使わないので）が必要です。このための練習として私は、ドリブル、1 ： 1、タックルに時間をかける必要があると思います

ドリブル

＊ゴールラインからゴールライン往復（途中で一息入れる）
＊全速力
＊フエント
＊切り替えし（大きく、小さく）

1 ： 1

＊ゴールラインからゴールライン往復後攻守交代
　守備側の選手は間合いの取り方等の練習である。またタックルを可とする場合もある。

スタンディング・タックル

＊相手の足元にあるボールにサイドキックの要領で腰を低くして飛び込む。
　このとき上体が前のめりになるとボールは相手に残り失敗する。

スライディング・タックル

＊ドリブル中のボールは当然の事乍選手の足元より離れる場合が多い。
　離れたボールに対してはスライディングタックルが適切である。

シュートについて

＊いくらボールをキープしてもシュートをしないとゴールは奪えない。
従ってシュート練習は極めて重要と思います。私はシュート練習は全体練習でなく
個人練習でやるべきと思います。「シュート板」は、そのためにあるのです。
練習の前後或いは練習のない日に納得がいくまでシュート練習をしたいものです。
シュート練習は狙う場所を決めてキックすると効果的です。

私が４年生の時、酉松会幹事長の松浦大先輩が学生の要望を聞き、OB の特別寄付を集め
待望した「シュート板」が設置されました。当時のグラウンドは現在と異なり
玉川上水寄りの東西に長く、「シュート板」は、その東側に出来ました。

《シュート板の変遷》・・酉松会 WEB の写真アルバムより抜粋

★昭和 30 年（1955）設置まもない頃

★昭和 40 年（1965）かなりボロボロ

★昭和 50 年（1975）頃 いつしか修復され復活

★平成 22 年（2010）長く使われずに放置

松本弁護士と囲碁のはなし・ほか

斎藤 哲雄 （昭 35 卒）

(1) シニア・サッカーと O-70 のチーム・武蔵野への『お誘い』

SOI・SFL・O-75 の集りほかでシニア・サッカー始めました。
50 数年ぶり再開・４年目。大分苦労しましたが、目下順調 ～ ６・７回 / 月 練習会参加。

東京地区では O-60・O-65・O-70 のリーグ戦もあります。
O-70 リーグは現在、WKU（早慶連合）・東大ＬＢ・東京四十雀ほか計６チームありますが、
新しくチーム武蔵野を仲間と立上げ、本年４月から参加予定です。
名前のとおり武蔵野・多摩主体のメンバーですが員数ギリギリです。
よろしければ『酉松会の皆さんのご参加』を頂きたく・発起人の仲間も歓迎の意向です。

酉松会での O-60 チーム結成は要員不足でムリと先般・判明
（安部副会長お手数おかけしました）～ 残念。
そこで今回、チーム武蔵野を『酉松会の皆さんのささやかな集いの場』としてご利用頂ければ
とも思っております。如何でしょう？上智も２名（鶴岡さん、森さん）おります。アト京大１名。
試合会場は駒澤補助で月１程度（第３金）。

写真：O-70 東西対抗　国立競技場　2013.11　後方左赤シャツ・廣田弘太郎

(2) さしご会への『お誘い』

さしご会は大石先輩（昭 34 卒）の命名ですが、始まりは 35 年組の飲み会で、
２～３回で話題もなくなり碁でも打とうか～となった。田中高峰（故人）が如水会館で
駒井先輩に電話したのを想い出す。それを聞きつけて 36 年組が『雪崩込み』（日巻さん談）、
瀬戸泰ちゃん（昭 37 卒）も加わった。囲碁＋飲み会が絶妙にマッチングしてか、小野・小林・
飯沼の幹事団の『サバキ』が巧みだったか。気がつけば 17-８年続いている。めでたい（笑）。

昨年９月より、石綿さん（昭 39 卒）白石さん（昭 40 卒）が加わり、
活気が蘇ったと（三田さん・談）。白石さんは幹事役を仰せつかった。ご苦労さま。
そのような状況ですので、アトどなたでもご参加いただければ大歓迎です（出入り自由）。
お待ちしております。如水会館囲碁室・月１ / 第３月曜日（原則）

(3) 松本弁護士と近藤士郎と平本プロのこと
～『松本正雄先輩を偲ぶ (酉松会・編) 』の補足・番外編として～

如水会館近辺を歩いている時、近藤さん（昭 35 卒・同クラス・東京ガス）が突然、
『松本弁護士が生きていてくれればなあ～』と云い出した。問い質すと松本弁護士は如水囲碁
同好会の経費の相談に上がると、いつもポンと出してくれた。そういう方は三菱銀行の某氏と
お二人のみでした～という『先輩幹事から聞いたはなし』を教えてくれた。松本弁護士は
酉松会への財政支援だけではなかったのだと、小生納得？

本学唯一のプロ棋士・平本弥星（旧姓・畠）の『碁の知・入門編』(p.59）に
『碁は幾つになってでも始められます』という事例として松本弁護士と囲碁のはなしが紹介され
ております。松本弁護士は 94 歳まで碁を打たれ、最後まで上達されたと（平本プロとは三子)。
話は逸れますが、平本プロのことは『季刊誌ＨＱ』に詳しい紹介あり、先輩と碁を打つために
本学に入った由。『碁打ちが、たまたま本学に入学した（笑)』らしい。

また別の日、近藤さんと野口さん（東大・東京ガス）が『二郎が～貞子が～』と話していた。
高田馬場に平本プロ主催の JoJo の会がある。『貞子さんはそこで四段格で初心者の指導』を
されている。近藤さん野口さんも顔を出している。そして二郎・貞子は松本弁護士の娘さん
ご夫妻と判明。それで、近藤さん経由でアポを取り、小林成古ちゃんと高田馬場に貞子さんを
表敬訪問した。JoJo の会はご婦人方が沢山集まる～素晴らしいが・珍しい囲碁の会とお見受け
した。もちろん平本プロにもご挨拶。

平本プロは松本弁護士のご自宅で毎月１度、指導碁を打たれたと聞く。
すると『松本弁護士・二郎・貞子ご夫妻・石綿さん相手の四面打ち』だったのでしょうか？
『大変な囲碁一家』ですね！ 松本弁護士はご自身も指導碁が楽しみだったのでしょうが、
平本プロの支援をしてあげたかったのだろうと拝察しております。
『平本プロの大スポンサー（？）』

松本弁護士の父親が高川本因坊と対戦した棋譜が『棋道』に掲載されたと
（四子と記憶すると石綿氏・談）。そのあたりが松本弁護士の囲碁好きのルーツかも。
そして晩年平本プロとは三子。『プロに三子』は六段格。我々アマ憧れのレベル・・・
小生も平本プロに三子が、ひそかな目標（目下四子）です。

以上、小生ここ１０年ぐらいの間に知り得た事柄です。
酉松会の皆様も松本弁護士と囲碁がらみの話は、左程、ご存じない側面かと思い～
筆を取った次第です。

随想 我が故郷のヴァンフォーレ

田中 好輔 （昭 41 卒 甲斐日産自動車〈株〉取締役会長）

阿部君からのお誘いを奇貨として、拙文を認めます。以前本紙発刊時に相良君からの強いご要請にお応え出来なかったことが多少トラウマとなり逡巡しましたが、テーマを思案し、ご無沙汰続きの現役関連に触れることは避け、何はともあれ最初に小生が帰郷している山梨県甲府の「ヴァンフォーレ甲府」の話だなと考えました。（外にも、富士山の世界遺産登録やリニア新幹線着工など地元の話題は結構豊富なのですが・・）

歴史をひもとけば、日本リーグやＪリーグの発足前、現横浜Ｆマリノスの前身、日産自動車の実業団サッカーチームが未だ弱体で、甲府の片田舎の一販売会社に過ぎぬ当社のチームに親善試合の度に一蹴されていた時代がありました。逆に、そのぐらい当時の当社（その経営者が小生の父親でした）のサッカー部は、県内でも抜きん出たレベルの実力を持っていた訳です。そんな地元サッカー興亡史的な関係から、日本リーグ２部の甲府クラブに淵源を持つ「ヴァンフォーレ甲府」と当社とは切っても切れない関係が続いており、今でも些かスポンサーの一角を占めています。大きな『日産』というブランド旗の下だから、販売会社もマリノス応援なのだろうと見られ易いのですが、その締め付けはなく、当社は地元主義に徹することにしています。

そのヴァンフォーレ甲府には、昨シーズン最後まで肝を冷やされましたが、最終 15 位を確保し、J1 ステータスを 3 年連続で確保できることとなりました。地元での人気は大変高く、応援体制は文字通りグラスルーツで広がっています。この成績を置き土産に城福監督が辞任し、後任にマリノスの樋口監督が大きな期待を背負って就くこととなりました。城福監督は、“プロビンチア provincia”というイタリア語でチームの目指すあり方を鼓舞していました。小さな片田舎が地域一丸となって特色と存在感のあるチームを共有する、そんな姿を言うのでしょうか。企業色なくグラスルーツ型のチームとしては、お隣長野県松本市の山雅がJ1 昇格を果たし勢いがあるので、今後のライバル対抗が観物というか、肝を冷やすことが又増えそうです。読者諸兄も、少し注目度を上げて頂ければ幸いです。

最後に、先日（1 月 21 日）昭和 36 年卒の小沢純一先輩が急逝されました。77 歳と未だお若く、静子未亡人からは突然の心臓麻痺と伺いました。高校、大学、サッカー部、ゼミナール（増田ゼミ）の先輩に当たる方で、まことに残念至極、哀悼の意を捧げます。合掌。

還暦ラン

瀬川 雄二 （昭 51 卒）

大学を卒業して 40 年近くが過ぎようとしています。
卒業後まともに運動などしたこともない人間が、高校時代の同級生がハーフマラソンを夫婦で完走したと聞き、負けてなるかと思い立ったのが 2 年前の 58 歳の秋。
それから約 2 年の間にハーフマラソンを 4 回完走し、満を持して平成 26 年 11 月 9 日に岐阜県揖斐川町で開催された「いびがわマラソン」で初めてフルマラソンを走りました。
その「いびがわマラソン」について書こうと思います。

「いびがわマラソン」は 1988 年から開催されている、とても歴史のある大会です。
エントリー人数は、フルマラソン 6000 人、ハーフマラソン 4000 人で、北海道から沖縄まで、ほとんどの都道府県から参加者がある人気の大会でもあります。

ちなみに平成 26 年の 6 月 16 日のインターネットエントリーは約 40 分で終了しました。
エントリーするには、この「クリック合戦」にまず勝たないと行けません。エントリー開始の午後 8 時からパソコンの前で祈るような気持ちで待ち続けること 20 分。つながった時には当然ガッツポーズ。ここから約 5 ヶ月間、少しずつ少しずつ走りながら 11 月の本番を待つことになります。

我が家は近くに鳥羽川という川が流れており、その堤防が普段のランニングコースです。
私の住む岐阜市北部は自然がまだたくさん残っており、堤防からは田んぼや畑を見渡すことができます。また見上げると岐阜市のシンボルの金華山があり、その頂上には岐阜城が見え、四季折々山がいろいろな色に変化するのを見ることもできます。5 ㎞から 10 ㎞、時間にして 30 分から 1 時間は、この自然を独り占めにした気分です。途中ですれ違う犬の散歩組やランナーと挨拶を交わしながら、ゆっくりと走っています。11 月のフルマラソンの本番に備えて今回は 2 週間前に大垣市で行われたハーフマラソンに出場しました。過去 3 回のハーフマラソンのベスト記録を更新し、手応えを掴んで本番を迎えることになりました。

とうとうやってきた 11 月 9 日の「いびがわマラソン」。この日は朝からあいにくの雨。
「いびがわマラソン」の雨は 3 年連続。それ以前の 10 年間は 1 度しか雨はなかったそうで
誰のせいなのか、ちょっとテンション下がり気味。朝 5 時 30 分に起き、7 時 30 分には指定の
駐車場に到着しました。すでに駐車場はかなりの車で愛知、三重、京都など他府県ナンバーの
車も多数。駐車場の案内係も地元のボランティアの方が大勢いらっしゃるのですが、人口 2 万
2000 人の揖斐川町の 1000 人以上の方が、この大会の様々なボランティアをされています。
このボランティアの方たちの力に助けられて我々が走ることができるのを実感させられる
大会です。42.195 km のコースはあらかじめ綺麗に掃除されており、落ち葉などもほとんど
ありません。ところどころ手作りの応援看板もあり、おもてなしには頭が下がります。

午前 10 時フルマラソンスタート。スタート前には緊張と雨による寒さもあり、
2 回もトイレで用を足しました。スタートは申告タイム順で、我々制限時間いっぱい組（?）は
合図のピストルが鳴ってから約 4 分後にスタートラインを通過。スペシャルアドバイザーの
岐阜市出身のレジェンド Q ちゃん（高橋尚子さん）に声をかけてもらい、テンション大幅に
アップ。しかしスタート渋滞で 1 km ぐらいまでは歩くのと同じ位のゆったりとしたペース。
3 km を過ぎたあたりから揖斐川沿いに堤防を上流に上ってゆきます。フルマラソンのコースの
標高差は約 120 m あり基本的には前半が上り後半が下りですが、細かいアップダウンもあり、
とてもタフなコースです。約 8 km 走ると揖斐峡大橋を渡ります。この時期、美しい紅葉が進み
揖斐峡からの景色は抜群です。この後、揖斐川を左に見ながら進み中間点の旧藤橋村の元藤橋で
折り返します。ハーフマラソンも同じですが、全行程の半分まではとても気分よく走ることが
できます。ところが後半はだんだん足が重くなり、残り 4 分の 1 は「もう走るのをやめたら」と
いう誘惑と戦いながら走ります。

「いびがわマラソン」の 29 km 過ぎと 32 km 過ぎには上りがあり、ここが一番の難所。
ここまで進むと、上りになったところで歩く人がかなり多くなります。でも一旦歩くと走り出せ
ないような気がして、とにかくゆっくりでも 1 歩ずつ進むと、33 km からはなだらかな下りが
続きます。35 km 過ぎで、コースの沿いの民家から出てきて応援してくれている年配の方から、
「また来年も来てください」と声をかけられ、絶対来年も帰ってくるぞと思いながら、ゴールに
向かいました。そして揖斐川の堤防を降りると、やっとゴールの揖斐川町役場が見えてきます。
過去のハーフマラソンでは、ゴールしても、ただもう走らなくてもいいという気分だけでした。
しかしさすがにフルマラソンのゴール前ではぐっとくるものがあり、恥ずかしい話、もう少しで
涙が出そうになりました。涙をこらえてゴールしたところでボランティアの女子高生に完走記念
のバスタオルを肩にかけてもらい、笑顔でお礼を言いながら気分は最高。42.195 km 歩くこと
なく完走できました。タイムは目標にしていた 4 時間 30 分（サブ 4.5）には遠く及ばず、
4 時間 47 分 9 秒。来年は走力をつけてリベンジすることを心に誓って帰路につきました。

コース途中のエイドステーション（給水所）で用意された、おにぎり、いなりずし、柿、みそ汁、チョコレート、いび茶、どれも美味しくいただきました。明るくハイタッチしてくれた幼稚園児や小学生たち、ずっとフライパンを叩きながら応援してくれた女の子、揖斐川の対岸から手を振ってくれた人、雨の中車いすで声をかけてくれた年配の方、走り終えてまたコースに戻って激励してくれたランナーたち、そして何といっても地元の揖斐川町のたくさんのボランティアの方々、皆さんのおかげで完走できました。ありがとうございます。感謝の気持で一杯です。
今思い出しても夢のような時間でした。「いびがわマラソン」最高です。
サッカー部 OB の皆さん、次回、私と一緒に「クリック合戦」に参戦しませんか。

雑感 vol. 2

金谷　斎　（平１卒 三菱東京 UFJ 銀行）

昨年に続いての寄稿となりました。たかが１年、されど１年。
やはり時代は流れるようで、昨年書いたことに関しても幾つかの変化が。
世界のサッカーシーンは、ワールドカップで前回チャンピオンの無敵艦隊が予選リーグで目を覆う惨敗の末、轟沈。クラブレベルでも、それまで次元の違うところにいるように見えたバルサのサッカーも次第に目に慣れ、チャンピオンズリーグでは３年に亘り沈黙。諸行無常は世の常ながら、皆がこぞってトップを追いかける現代においては、浮世の移ろいは大方の予想より少し前を行く。ただ、それは人間の創造性を示す証でもあり、今そうでない者にも可能性があるということも意味する。多分、そういうことだろう。

転じて自分はというと、
あざみ野のジュニアチームで小学３年時から４年間指導してきた子供たちが卒業し、
今年はぐるっと回って小学１年生＆幼稚園年長というスタートカテゴリーを担当することに。
アップはラダーのステップや４対２から手つなぎ鬼やけんけん相撲になり、ポゼッションの意義を諭す代わりに、砂場にいるよりボール触る方が楽しいよ～と説得するのが主な仕事になった。ちなみに、この場合、砂場に立てこもる犯人が説得に応じないことが圧倒的に多いが、強行突破の成功率もほぼ皆無だ。相手は変わっても、やはりサッカーは難しい。というかサッカー教える以前だけど。どうやら今は、人を育てる要諦の一つは忍耐だということを学ぶ時期らしい。

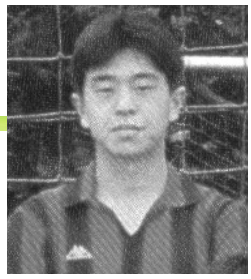
そういえば、そのジュニアチーム出身のメンバーが２名、一橋サッカー部の仲間入りをしたという噂も耳にした。10 年以内に教え子を送り込むぞ大作戦を心に秘めていたので、これは嬉しい誤算。是非本気の４年間を送って欲しいと願うとともに、暇な時はサッカーを始めた頃の原風景（あざみ野第二小の砂場、じゃなかったグラウンド）にふらっと顔を出してくれることも仄かに期待してみたりしている。

ところで、一つ変わらなかったことがある。
一橋大学ア式蹴球部は今年も東都２部にいる。一つ一つの試合の経過、結果、最終的な７位という成績には、そこを目標に臨んだわけでは当然ないだろうから、忸怩たる思いが日を追うにつれ増す時期と思う。ただ、シーズン後半に恐らく切り替えたであろう目標には這いつくばりながら何とか食い下がった。去年と同じ目標を今年も追える。それで満足したら、それこそ終わりだけど、でも、粘ってそこに留まった意味も小さくはない。少し想像は入るが、今年はチームとして、個々人として、その去年をどうとらえ、どう活かせるかが、いつもの年にも増してより大切な要素になるような気がする。しっかり振り返り、受け止め、前進して欲しい。

もしかしたら、来年も、締切過ぎに慌てて、
週末の夜中にこれ書いてたりしてなぁ・・などと思いつつ。
現役に限らず、みんなの努力が実を結ぶ１年になってたら、まぁそれはそれで悪くないか。
たかが１年、でもやっぱり、されど１年だ。

★夏の合宿風景

聞いてるようで、実は“暑いなあ”と思ってる・・？



当時のこと（むさ苦しい集団）

鈴木 仁也 （平９卒 三菱東京 UFJ 銀行）

今はもうすっかり変わってしまっていると思うが、我々の頃は国立で授業を受けるのは３・４年生のみであり、１・２年生は小平校舎で講義を受け（？）毎日の練習に臨んでいた。授業に出ていたかどうかはともかく、昼過ぎには食堂に１人また１人と顔を出し、練習時間が近づくとゾロゾロと部室に向かった。足の踏み場もない部室に野郎がひしめき合い、１年生は表面の剥がれたボールをやたら思い鉄のカゴに入れ、ズルズルとグラウンドに向かって引きずっていた。当時のリーグ戦は９月から 11 月にあり、毎週日曜日の試合後はブリッジワンで賞味期限の切れたパンにかぶりつき、夜には OB を無理やり捕まえ数十名で「藤乃木」と「じゃがいも」を占領するのが、お決まりのコースだった。

練習中は、右隣からアメフト部員が大きな体をゆすりながら時々乱入してきたし、左隣からはフィールドホッケーの固いボールがものすごい勢いで飛んできたりする中、砂埃の舞うサッカーグラウンドでボールを追っかけていた。今思うと、ハタから見た人には相当むさ苦しい集団に見えていただろう。当時の女子マネも華やかなキャンパスライフではなくこんなメンバーの為に、本当に献身的かつ積極的に身の回りのサポートをしてくれたことは、今でも頭の下がる思いである。色々なやつがいたが、サッカーに対して前向きなメンバーが揃っていた。我々の代は 18 名と比較的多くのメンバーが入部。そのほとんどが途中で退部せず最後まで共にサッカーに明け暮れた４年間だった（ことしか覚えていない）。そうした仲間とは今でも繋がりがあり、シンガポールでは我々年代のメンバーが 10 名ほど駐在し現地で集まっていたりする。最近は諸先輩方と色々な所で仕事やプライベートでご一緒することも増え、酉松会の繋がりの深さを今になって強く感じている。月日を経ても、こうした人の繋がりは大切にしたいものである。

★写真は毎年恒例のサッカー仲間との新年会

惜別 岡田紀雄君を偲ぶ

岡田紀雄（昭 38 卒）

石井 暢生 （昭 38 卒）

昭和 37 年度の関東２部のリーグ戦は、故岡田紀雄君が主将としてチームを引っ張り、最終成績は３勝４敗で同率３位の成績で終わった。春の国公立戦の東大（同じ２部）筑波大（１部）を破って優勝をした勢いから、東大に１対０で惜敗したことが同率３位に終わったことは本当に残念なことだった。岡田君は東京教育大学付属高等学校出身で、当時同校はインターハイ出場校で入学当初からレギュラーメンバーに起用され同期の誉れでもあった。昭和 37 年次のメンバーは故菊池英輔君（主務担当）以外は全員自宅通学者で、同期の結束が高かったことは確かにあった。学年後期が終了して帰省する者は、全員ボールを持参することとし、春の小平合宿は初日からある程度の体力とボール扱いに馴れている前提で、きつい練習でスタートした。休暇中の体力練習に手を抜いた部員の中には、３日ぐらいから落伍する者も数人いた。この方針は岡田主将の強い要望であり、グランドマネージャーと最上級生の一致した方針で、最上級生ほどきつい練習でもあった。今から思うと、良くみんなついて来てくれたものだと思う。

岡田主将は、特に対東大戦には執着した。
東京教育大学付属高校のインターハイ出場メンバーが、東大サッカー部で同様にレギュラーメンバーで活躍しており東大には絶対に勝つんだとの意識が強かった。特に畔柳選手がライバルであったかと思う。彼のプレーの特徴は、右インナーのポジション（現在ではトップ下に該当か）で攻撃も守備も縦横無人に駆け回り、スライディングタックルの激しさとファールすれすれの相手攻撃は一瞬にして不利な戦況を優勢にし２部リーグの注目選手であった。彼は２部のベストイレブンに選出されてもおかしくなかったと思う。（１部にはベストイレブンがあったと思うが、２部にはなかった） また彼は常に相手から執拗なマークをされていたが、少々の怪我や打撲はものともせず闘争心も凄かった。昭和 37 年次の成績が良かったのは岡田君の奮闘が目につくがFA 川村（韓）・野上・山内（伊藤）・DF の吉田・清水・細野諸氏の最上級生に加えて、３年生の森岡・石綿・永山・池田・石井・大橋、２年生の古川、１年生の清水の面々の活躍があったからでもある。

岡田君はサッカーもそうであったが、卒業後の勤務先でも何事にも挑戦し、苦しい時ほど周辺状況を見定めながらタイミング良い行動をとり、仕事面でも大いに跋扈していた。最後は激務が祟ったのか病院治療を余儀なくされたが、同期会には体調が良ければ無理してでも顔を出し、古のサッカー談義に時間を忘れて腹の底から笑い合った。いつまでも懐かしい友であった。故野上恵一、故細野宣昭、故菊池英輔諸氏と、あの世で談笑しているのだろう。

★昭和 37 年次の４年生（卒業アルバムのために撮影された写真）

★昭和 56 年（1981）の集まり

故古川和正先輩を偲ぶ

清水　征四郎　（昭 41 卒）

古川和正（昭 40 卒）

私の長いサッカー人生、そして特に一橋大学ア式蹴球部（以後サッカー部という）との関わりに決定的な影響を与えてくれたのが、古川先輩である。
亡くなられて早や半年が過ぎるが、数多くの思い出を振り返りながら彼を偲んでみたい。

大学に入り、中学/高校時代にやって来たサッカーを大学でもやりたいと思い入部したが、その時１年上の２年生に居られたのが古川さんだった。彼は当時の高校サッカーの名門の１つであった神戸高校を卒業し（高校時代はサッカー部に所属されていなかったようであるが）、大学では２年からレギュラーとして試合に出場し、私も幸運に１年の時から毎試合出してもらったので同じような立場でサッカー部生活を送らせてもらった。

１年生の時の三商大戦は関西で行われ、共に 15/16 人の遠征メンバーの一員に選ばれた。遠征後は宝塚の古川邸に泊めて頂き、母上/姉上の美味しい食事をご馳走になり、ゆっくり過ごさせてもらったことを思い出す。又、春のシーズンが終わった時には１/２年のチームで立川高校と練習試合をやり、試合後、小平の寮の集会室で決してきれいではない洗面器を使い、安いマトンのジンギスカン鍋とビールを飲み食いしながらドンチャン騒ぎをしたことが懐かしい。

当時は、試合の翌日とゼミの日だけが練習休みだったので、１年生は毎週６日間練習であった。高校時代は部活が週２回ではあったが、神奈川県のトップクラスであった反動か大学にサッカーだけをやりに入ったのではないという思いもあり、１年生終了時の春の合宿にはやれるだけやって終了時には退部しようと心に決め参加した。合宿終了時の打ち上げの席でその旨発言すると多くの人から引き留めと疑問の言葉があったが、決心を変える気は全くなかった。

退部してから２か月余りぶらぶらしていたが、何をする訳でもなく、好きなサッカーに惹かれるのが自然で、その内小平のグランドの脇で練習を見ていることが多かった。そんな時に声を掛けてくれたのが古川さんで、彼の下宿のあった阿佐ヶ谷で一晩飲みながら、いろいろな話をしたことがあった。飲み過ぎで潰れてしまい離れ離れになったが、うろ覚えでどうにか彼の下宿まで辿り着き、玄関わきで地べたに寝ているところを、私を探し求めて後から帰って来た彼に見つけられ、下宿の中に担ぎ込まれて翌朝まで熟睡した。何をこの時話したか、はっきりした記憶がないが、サッカーだけでなく大学生活そのものについて、いろいろな話を聞かせてもらったと思う。この日がきっかけで、しばらくしてサッカー部へ復帰したが、彼との関係がなければ、その後の現役生活もなく、又酉松会会員としての大学サッカー部との現在までの長い付き合いもなかったことになる。

彼は左利きで当時で言うレフトバックのポジションが多かったが、
たまに右足で蹴り損なうと絶好のセンターリングのようなボールが自陣ゴール前に上がってくるので、ひやりとすることもあった。４年キャップテンの時は不動のセンターバックで、気が強く腹が据わって居り、しぶといプレーでバックの要として重責を担い、関東２部から３部へ陥落する可能性が高いと思われていたリーグ戦を、無事戦い抜いた。最終戦終了後、駒沢のグラウンド脇に全員集合したところで、来年はお前がキャップテンだと指名され、彼のようにできるかとの不安を感じながら、気の引き締まる思いをした。

卒業して三菱商事に入社されたが、私も又、引っ張られるように翌年同社に入社した。
その際、入社面接の話を参考までに尋ねたところ、“優の数を聞かれたので、１桁と言ったらえらい少ないと驚かれたが、サッカーをやっていなければいくつでも取れたし、優の数以上にサッカーをやっていて得たものが多く、全く心残りはないと言ったら採用してくれたので、お前も全く問題ないぞ“と言われ彼の凄さを再認識した次第である。会社生活では仕事の分野が異なっていたので平日は会うことがほとんどなかったが、毎週日曜日に（当時は土曜日は出勤であった）グラウンドで顔を合わせて試合をやり、その後はビールを飲みながら語り合うのが常であった。

酉松会との関連では、高田大先輩が会長を辞められる時（当時、私は副会長の１人であった)、いろいろな方と相談しながら後任の会長探しを担当させられた。なかなか思うように進まず困惑したが、そのうち辿り着いたのが古川さんだった。時代の変化を考えると相当の若返りを図り、その事に依って、若い世代も酉松会の活動に積極的に参画してもらう事が必要であった。
又、酉松会とサッカー部の学生連中との関係を、更に緊密化することも必要と考えられた。
彼は当初固辞されたがこれらの点を彼と話し合い、最終的にやっと了解を得て会長就任を受諾してもらった。但し条件として出されたのは４/５年で退任し次の人に替わる事。又、彼が会長である間は継続して副会長としてサポートすることであった。その約束に従い、彼の会長辞任と同時にお役御免にしてもらった。

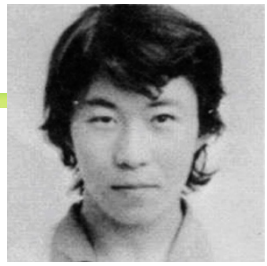
その後の酉松会及び学生の活動をみると、その後の人たちの尽力もあって順調に若返りも進み、又現役との一体感ある関係も良好である。古川さんも、あの世であの時の話を思い出しながら喜んでおられると思う。引き続き学生サッカーと酉松会を見守って頂きたいと願いながら、筆を置く。

上の写真は、昭和 37 年（1962）６月、三商大戦の関西遠征時に大阪市立大で撮ったもの。
後列左から３人目が、故古川和正さん。小生は、後列左。
なお前列左から２人目が、故岡田紀雄さん。
後列右から５人目が、岡田さんと同期で同じく三菱商事の、故細野宣昭さん。
この商事入社４名のうち、現存は小生のみになってしまった。

古川和正

清水征四郎

克くんの思い出 ～1周忌に寄せて～



池田克彦（昭 51 卒）

高橋 良多 （昭 51 卒）

早いものであの突然の悲報から 1 年が経ちます。
ここに“1 周期の弔辞”を克くんに捧げたいと思います。

克くん、長い間の病気との付き合い大変でしたね。でも、こんなに突然、帰らぬ人になろうとは誰が予想できたでしょうか。本当に早すぎたよ。僕が退職したら頻繁にみんなで集まって、克くんの持ち前の語り口を聞けたのにそれも叶わなくなってしまいました。残念でなりません。

振り返ってみれば克くんとの出会いは 43 年前、大学に入学して間もないサッカー部の小平のグランドでした。それは長い髪に薄い白のハーフストッキング姿で半身で小刻みなドリブルをやっている克くんの姿でした。変なヤツがいるなー、僕より先輩かな、と思わせたりもしたその姿は今でも脳裏に焼きついています。

左：池田克彦 / 右：高橋良多

克くんとフォワードコンビを組み全くプレータイプの違うふたりだったけど、リーグ戦、国公立戦、天皇杯予選などを共に闘ってきた頃のことが、昨日のことのように思えます。僕らの代は 4 年連続で入れ替え戦。しかも全て勝利するという波乱に満ちた大学サッカーを経験したね。3 年生のときから関東リーグに上がり元日本代表のメキシコ五輪銅メダリストでフルバックだった片山さんがコーチをやってくださったときに、「りゃん・克のあうんの呼吸のコンビネーション」と言ってくださり、すごく嬉しかったのを覚えてるよ。4 年生のとき、僕にとって大学最後の公式戦になった駒沢競技場での専修大学との入れ替え戦で、克くんに合わせてもらった“得意の左足からのカーブのかかったセンタリング”を、ヘディングで得点したときの僕の“大学サッカー集大成のシュート”は、一生忘れられないものとなりました。

平成６年（1994）タイ・バンコクにて

その後同じ会社に就職しながら、勤務地が異なり、なかなか会う機会がなかった中で、20 年前タイに同じ時期に赴任していたときによく家に来てもらったり、ゴルフをやったりした楽しいひと時がありました。あれも僕にとって忘れられない克くんとの思い出になっています。

克くんは、大学１年の時からずっと変わらず良き友人でいてくれました。男兄弟のいない僕にとって克くんは、兄弟のような存在でした。克くんがいるから、僕も頑張れる・・・いつもそんな思いで生きてきました。耳を澄ますと一緒にグラウンド戦っていた時の耳元での克くんの声が聞こえてきます。また、一緒に酒を飲みながら語り合っていた時の克くんらしいユニークなコメントが聞こえてきます。
克くん、どうぞ安らかに眠ってください。
また、天国で会う日まで。克くん、本当にありがとう。

“りゃんた“ こと、髙橋良多

編集後記

⚽ 発見、そして追悼

福本　浩　（昭 52 卒）　編集長

投稿してくださった皆さん、ありがとうございます。
今回寄せられた原稿を読んで、昨年から気になっていた小平グラウンドの「シュート板」に関する新たな発見がありました。高田克巳氏（昭 30 卒）によれば造られたのは何と 60 年前！シュート板が欲しいという学生の要望に応え OB の方々が特別寄附を集めて設置してくれたそうです。そんな大先輩たちの想いが、今では見捨てられていることに寂しさを覚えます。小平 G の人工芝化も大事ですが、ぜひ「シュート板」の復活も考えていただきたいと思います。もう 1 つ私の胸に響いたのは、やはり亡くなられた OB の方への追悼記事です。大切な仲間とサッカーに明け暮れた大学時代の 4 年間は、本当に人生の宝物だったと改めて感じます。現役諸君は、1 部昇格を果たせなかったことで、成し遂げたことは何もない」とか「振り返りたくもない」と書いていますが、「そんなことはない、胸を張れ！」と言いたい。どんな結果であろうと諸君の存在は、先輩、同期、後輩たちの胸に残っています。だから小平グラウンドで過ごした 4 年間を誇りに思って、いつまでも宝にして欲しいです。最後に、私も前頁の高橋先輩に倣い、1 年上の先輩である故池田克彦さんの 1 周忌に寄せて、弔辞を捧げることにします。

弔辞

克さん、思えば不思議な縁でしたね。中学、高校、大学・・あなたと私はずっと同じサッカー部の先輩と後輩でした。初めて出会った中学のグラウンドで、あなたは開口一番“兄貴はハンサムで、カッコ良かったのになあ”と言い、みんなを笑わせました（入れ違いで卒業した兄も、同じサッカー部だった）。ハイハイ、おっしゃる通りでございますよ。でも、何も今ここで言わなくてもと腹が立ちましたが、おかげさまで人見知りが激しい私が、すんなりと先輩方に溶け込むことができました。その後、高校、大学でも同様で、大変感謝しております。

宇都宮大学教育学部附属中学校時代

池田

福本

宇都宮高校時代

中学時代のフォーメーションは WM で、克さんは、左のインナー。高校時代は、ブラジル代表の影響で４-４-２が流行し、左のサイドアタッカーでした。栃木県の県大会で優勝し、関東大会にも出場した強豪校でしたが、克さんが一生懸命練習する姿は記憶にありません。“汗と涙”、“根性”という言葉とは無縁の人でした。ジョージ・ベストを気取ってユニホームをパンツの外に出し、長髪を風になびかせながらドリブルする姿は、面と向かって言ったことはなかったけれど、なかなかカッコよかったです。

大学時代、那須での夏合宿が終わった後、同期の何人かが宇都宮の私の家に泊まり、その翌日、克さんの実家である近江屋酒店を訪ねました。するとご尊父が「オリオン通りで（宇都宮で一番にぎやかな商店街）“金粉ショー”をやってるぞ」と教えてくれ、見に行きました。以来、我々の故郷のイメージが“金粉ショー”に塗りつぶされてしまったことは、本当に残念なことでした。

栃木・那須での夏合宿

亡くなる１年前の正月、OB 戦が行われている宇都宮高校のグラウンドを訪ねたとき、克さんに電話しました。「一度行きたいなあ」と言ってたからです。卒業以来 40 年ぶりという同期２人と話した後、「フク、もういいよ」と寂しそうに言った声が、今でも耳に残っています。かえって辛い思いをさせたのかなと悔やんでいます。先日、克さんの写真を探して奥さんを訪ねました。見せていただいたアルバムには、中学・高校・大学時代の写真がたくさん貼られていました。
それを見ながら、酒を飲みながら、あなたと昔話に花を咲かせたかった。告白します。
私が一橋大学を選んだのは克さんがいたからです。皮肉屋で、お茶目で、わがままで、愛すべき先輩だった克さん。私がサッカーを 10 年も続けられたのは、あなたがいたおかげです。生前に言えなくてすみません。本当にありがとうございました。

不肖の後輩、フクより